『なんども手をふる』

作　吉田康一

【登場人物】

カナ　――二十八
トモコ　――二十八
みさき　――三十
ミフミ　――四十二
敏行　――四十三
青年・カイ　――二十三
男　――五十代

【舞台】

渋谷のギャラリービル「ルデコ」。ここは2階から6階がレンタルスペースで演劇公演や写真展示など表現できる場所である。

上手側は、壁一面がガラス貼りで、日差しや街灯、信号機の明滅の灯りなどが差し込んでくる。
下手側は、壁の高い位置にサッシが多く並んでいて、西日や向かいのビルの明かりが差し込む。
下手奥には、トイレなどの空間につながる。
上手側には、エレベーターに通じる「出入口」などがある。
すべての壁は真っ白い。

【覚え書】

演出は、実際の会場や劇場にお任せするが、この作品は実際の渋谷のギャラリー・ルデコ（2017年6月リニューアルオープン）を舞台にして、窓から差し込んでくる自然光や街の外灯、渋谷の街の喧騒などを取り入れながら作品が彩られてゆくよう上演することを考えながら書いた。

1　その日のこと

シーン1

ギャラリー①（昼）

ギャラリービル「ルデコ」五階。この階は「休憩場所」として他階の利用者に解放されている。椅子などの備品以外、なにもない「空」のがらんどうである。

正午を過ぎた頃。
片隅で、青年が静かに読書している。他にだれもいない。

「出入口」の方からエレベーターの開く音が聞こえる。
ミフミが入ってくる。弁当屋のお弁当（品数多め）を手にしている。
ミフミ、青年に気づくと、どきんとして、

ミフミ　あ。（思わず声が出る）

青年は聞こえないのか、気がつかない。
ミフミ、ごく普通にしようとつとめて、踏み出す。

ミフミ　コンチワ。（と声が少し大きく出る）
青年　あ。（小さく一礼して、座り直す）
ミフミ　フフ。また一緒。休憩？
青年　はい。
ミフミ　おなじ。ごめんね。また。
青年　え？
ミフミ　コレ。食べるだけ。ちょっと（居させて）。ちゃちゃと食べちゃう（から）。
青年　ぜんぜんそんな。
ミフミ　こんなん（と弁当）、すぐ、すぐ。（椅子を指し）ココいい？
青年　いいっていうか、まあ、はい。
ミフミ　フフ。

ミフミ、青年から離れたところの椅子に向かう。
青年になるべく背中を向けて座って、袋から弁当を取り出す。

ミフミ　（弁当にいう）よーしッ。

気合いを入れて食べはじめるミフミ。

青年　……。
ミフミ　――（食べて、食べて、食べている）

ミフミ、本当にすぐに食べ終える積もりである。
青年、本に目を戻すが視界の隅でチラチラと気にしてしまう。
間。

青年　あの。
ミフミ　（弁当に一生懸命で聞こえない）
青年　あのー。
ミフミ　（耳にしたが食べ続ける）
青年　あのー。
ミフミ　（ん？　といいたいが、もごもごと）おん？
青年　（苦笑）ゆっくり。どうぞ。
ミフミ　（もごもごを整えて）五分の積もり。ほんと。
青年　……。

また食べるミフミ。食べる、というか、かき込んでいる。
青年、やがてずいぶん小さな声で話しかける。

青年　（目を伏せて）そっち、六階、忙しいんですか？
ミフミ　ん？　ぜんぜん。（食べる）そっちは？
青年　まったく。
ミフミ　きのうより？
青年　もっと（ひどいです）。
ミフミ　おなじ。

ミフミ、また食べる。さらにまた一口、食べる。

青年　（間あって、目を伏せて）猫って、案外、人気ないんですね？
ミフミ　（もごもごいう）
青年　え？
ミフミ　（もごもごを整えて）そんなことないない。みんな大好き。猫とジブリは
だあい好きなんだからみんな。（また食べる）
青年　……

間。

青年　あの、早食いってよくないですよ？
ミフミ　知ってる。
青年　太ったり。
ミフミ　しません。

青年　……。
ミフミ　（また食べる）

間。

青年　（目を伏せて、小さくいう）いちいち、わざわざ、写真みるってためだけに来るってほうが、
ミフミ　ん？
青年　よっぽどどうかしてますよ。
ミフミ　そ？　（食べる）
青年　こっちもこっちで、立ち寄ったヒト、引き止めて、世間話長々やって。
ミフミ　（もごもごしながら、さも当然のようにいう）それがたのしーんじゃない。
青年　（薄く苦笑、目を伏せて）おれ、気ィ遣って、社交話？長々やってると、なんか、じぶんスリ減ってくっていうか、（ああいうの）ヒトと触れ合うっていうんですか？（だけどおれ）ぜんぜん得意じゃないもんだから。気楽にクチ聞くのヘタなもんだから……（自嘲する）
ミフミ　（もごもごを整えて、遠慮なくいう）そんな感じする。オーラ。
青年　……まあ。
ミフミ　フフ。あたしもホントは得意じゃないけどねー。
青年　（意外で）…ですか？
ミフミ　（うなづく）はなし。エネルギーいるもんね。（食べる。食べる）

青年、おかしくて笑ってしまう。
ミフミ、変なこと言ったかな、とちょっと照れる。

ミフミ　いつまで？　そっち。三階。
青年　あさってです。
ミフミ　あーじゃあ（急がなきゃと思う）。見に行くね。（食べる）
青年　（間あって、目を伏せて）おれも。
ミフミ　ううん。ムリいわない。
青年　興味あるんで。
ミフミ　ンフ。ヌードだもんね？
青年　…まあはい。
ミフミ　フフ。写真じゃないけどね。
青年　べつに。
ミフミ　興味あるんだー。（食べる）
青年　からかわないでください。
ミフミ　ハイ。食べ終わり。（弁当のふたを閉じながら）お邪魔しました。

ミフミ、急いで立ち去ろうとする。

青年　あの。（と大きくいう）

ミフミ　（間あって、振り向いて）ん？
青年　（目を伏せて）きのう、たくさん話してくれたから、
ミフミ　アアアアアー。（と、つい大きい声）
青年　……？
ミフミ　やっぱり覚えてた？
青年　はい。
ミフミ　ほんと恥ずかしい。
青年　いえ。
ミフミ　忘れて。忘れてください。
青年　だから…今度会った時は…おれの番かなって。
ミフミ　（意外で、間あって）へえー。
青年　もちろん、急いでないんだったらだけど。
ミフミ　（間あって）ふーん。どんな話？
青年　（苦笑）いや、なんか、そういう…ネタみたいなんかじゃなくって、ただのおしゃべりっていうか。ありきたりな、ただのなんでもない。
ミフミ　なんでもないこと話すの？　ウフフ、急ごっかなあー。
青年　（目を伏せて）……（伏せたまま真顔で）おれ、ちょっと思ってて。
ミフミ　…え、なに？　え、なにを？
青年　（小さく考え考えいう）ヒトを判断するモノサシが、どんな面白いことをしたり、どんな面白い話や発言をしたかで、それで判断されるっていうか、評価されるっていうか、そういうこと、ちがうんじゃないかなって。静かで淡々、いっさい平凡、ありきたりで面白くナイ、だからって評価しないつまらない、それじゃ、なんかまるで、みんながみんなCM広告っぽく、美味しい美味しい、ウソつきになってって、ヒトの肝心な正直なところっていうか、素直なところみたいなところが、ますますみえにくくなってるんじゃないかって。

間。

ミフミ　それで？
青年　（ミフミを見て）……？　それだけですけど？
ミフミ　（苦笑）ンフ？　フフ？　考えすぎ？　まー、ハキハキしてるからマツコさん、人気あるもんね。あたしも好き。
青年　まつこ？
ミフミ　あの、デラックスな。
青年　（ピンとこず）ああ。
ミフミ　ね、昨日の（番組）みた？　祖師ケ谷大蔵だったの…て話はよくて、そうね、もっと脈絡気にしないで、わーわーすればいいんじゃない？　思いついたまま垂れ流しちゃうから、だからきのうは、まあ、恥ずかしいわけだけど。
青年　はい。
ミフミ　でも忘れてね？
青年　はい。きのうはたのしかったです。
ミフミ　（コラの調子で）ほら。

青年　きょうも、ちょっと話せるかなって（それでここに来ました）。
ミフミ　あら。（ウワッと嬉しい）
青年　（言い切るようにいう）です。（また目を伏せる）
ミフミ　なに？　聞く。
青年　（ミフミを見て）つまらない話ですよ？
ミフミ　うん。つまらない積もりで聞く。うん。
青年　（苦笑）期待してません？
ミフミ　フフちょっと。

音楽が入る――
ミフミと青年、立ち上がる。
ミフミはとどまり、青年は去っていく。

シーン2

音楽の中、カナ、みさき、トモコ、ミフミ、がいる。この四人の女性のポートレイトのような描写が交錯しながら進行していく。

部屋（夕）①

カナ、立ち止まったまま、しばらく白い壁を見ている。
音楽の中に、ひとつの音が重なる――

カナ　わたしのアパート、白い壁の向こう、隣の部屋から、あえぎ声が聞こえはじめた、女性の。毎週午後四時、曜日の間隔まちまち。生々しいこの声は、慣れてくるとなんてことなくなって、ドギマギ身震い、荒れに荒れ狂った怒りのハリケーンは、毎週のように繰り返されてはもう、あーまたやってるなーって、穏やかに感じちゃうようになった。ヒトは慣習の生きものであるようです。
聞こえてくるあえぎ合うふたりの声、隣の男女の性の営み、快楽、ヒトの秘めごと。わたしはわたしの作業をうっちゃって、ただ、ジッと聞く。この白い壁にすこし身を寄せてジッと。壁向こうの息づかい、荒い呼吸に合わせてわたしはそして呼吸する。していると身体がほてってくる。ほてったりするのでこれは、わたしのだれにもいえない秘めごと。隣に暮らす女性の顔は知らない。相手のオトコも知らない。知らないから目を閉じて、目蓋の真っ暗いスクリーンに、トニー・レオンを思い浮かべる。映画「ラスト・コーション」のエッチなシーンを思い浮かべる。声や息づかいだけでも、抱き合ったりもみ合ったりそれとなく体位までわかってくるので…ドキドキする。
壁ひとつ隔てた空間に、わたしとは違う人間がいて、生きていて、そのヒトなりの暮らしをしている。わたしだってそう。当たり前のこと。気にすることない、関係ないこと。だけど隣の女性に、オトコの声が何種類もいるってことに気づいた。気づいちゃってから、ふつうと思っていたわたしの「ふつうさ」が、ぐらぐ

らっとマグニチュードしてしまった。今日の相手はなんだかテレビでジャニーズ系の若い系のグループ系のどっかにいそうな、マダ男の子っていうような、ヤングな甘い声。だもんだから、もしや未成年？エッ未成年？とか想像したら、どんな衝動かわかんないんだけど、思いっきりアタマを白い壁にぶつけた。ゴツン、にぶく部屋中に響いて、全身までタァーーって痛みが響いて、フローリングの床にうずくまった。薄いのか頑丈なのかわからない壁の前にうずくまったまま、わたしは一体なにをしているんだろうって、まっとうな疑問を感じた。アーーーー、恋がしたい。ドキドキとかゆうよりも、も、こう、おしりの割れ目がウズウズするっ、みたいな、ような。
隣がうまく生きているようで、ヒトとうまく関係を結べているようで、羨ましく思ってしまって――外に出た。

カナ、一歩二歩踏み出す。

外（夕）①

カナ　真っ赤な空だった。みんなみんなが写メールしそうってくらい、真っ赤というか茜色の、不気味に深い色合いの赤い空。セカイの自然の不思議をみる、というより、自然の異常な具合をこうしてわたしたちの目に、脳裏に、シッカリ焼きつけてくるようでもあって、あとでこの空について調べてみよう、なんて思った。わたしたちの暮らす、いわば地球？が、もうすでにレッドカードを突きつけているのかもしれない。

見上げて立ち尽くすカナ。

ギャラリー②（夕）

音楽の中、ミフミがお菓子をポケットから取り出す。

ミフミ　お菓子をお客さんから頂いたので、おすそ分けにと思って、猫の展示を覗いてみたらいなくって、ここかと思ってみた。いなかった。…きっとカモメの玉子なんて困って食べたくなかったのかもしれないから、いなくてホッとする。コレをあげて、東京のごま玉子と味や傍目がどうちがうのか聞いてみたかったよ。ゴマですよ。きっというだろう。聞こえるけど聞こえにくい声でいうだろうよ、キミ。

ギャラリーの高窓に近寄る。

ミフミ　窓から差し込むヒカリが、とってもオレンジだった。ビルとビルのわずかの隙間からみるこのオレンジの、抜けるような空をみながら、カモメの玉子をい

ただきます。

ミフミ、空を見上げながら、お菓子をパクリと頬張る。

外②（夕）

音楽の中、ひとつの音が重なる。
みさきが、カバンを抱え直す。
喧騒の音が小さく聞こえ出す。
渋谷駅前のスクランブル交差点の一角。
みさき、ひとり深刻に立ち尽くしている。

みさき　ヒトの好さそうな顔をして、小さなカードを差し出しては募金の寄付を語ってくるから「わたしの旦那を差し上げましょうか？」と答えた。話が通じないような困ったような顔をするから「ぜひ寄付しますよ」、推してみた。いわれた。愛する旦那さんをいただくことはできません、お大事にしてください。（間）離れて行くフィリピン系の背中が、背中まで好青年にみえたから、豪快に威勢よく時速150キロを喰らわせたくなって、愛してるかわからないから奪ってくれよっ、無言の言葉を投げつけてやった。（間あって、なんとはなしに見渡す）耳ざわりと目ざわりばかりなので、ココにいなくたっていいと思う。けど、じゃあといって行く当てない。三〇歳になった今日、今夜は帰りたくない。待ってる夫の姿がありあり浮かぶ。

外③（夕）

喧騒の音が少し大きく聞こえ出す。
渋谷駅前のスクランブル交差点の別の一角。
音楽の中、ひとつの音が重なる。

トモコ　見上げている。一ヶ月前に撮影したCMがスターバックスの上のアレに流れる、から待っているのに、ぜっんぜんっ流れない。（間）目の前の交差点は、赤と青と赤と青の点灯をなんども繰り返して、おびただしい数の、多くは若者と外人をこっちから向こう、向こうからこっちに流している。置き去りの自転車を眺めるような視線で、あたしをみては通り過ぎていった。思った。人間は、男の子と女の子とおじいさんとおばあさんの四つのタイプにわかれているんじゃなかろうか。たとえば病院の待合室。男女の性別はあっても、たくさんのシワを蓄えて似たり寄ったりの顔をしている。生まれたばかりの女の子男の子は、詳しくみないとチガイがわからない。人間は、似たような顔をして生まれてきて、似たような顔をして死んでゆく、そんな気がする。目のまえを歩く、無数の若い男女も外人の男女も、どれもが似ているようにみえる。服装も四種類に分けられる気さ

えする。その服を買った時は「いいものを買った」と思ったり、「いいものを買ったね」といわれたりしているとは思うものの。（間）三時間以上は見上げている。もしやズーッとジーッとみているようで、もう見逃したのかもしれない。主演ではないから、そういうこともある。ありうる。友達と呼べるかわからない大学の頃の「友達」の、彼氏を思い出したから、せっかくなので珍しくメールしてみたし、虫がカナブンが寄りついたから、つま先をやたら気にしたし、たかが１５秒だし。（見上げる）オーロラビジョンは四つも他にあるし……。

見上げて立ち尽くすトモコ。

外④（夕）

喧騒の音が少し弱く聞こえ出す。
渋谷駅前のスクランブル交差点、また別の一角。
音楽の中、ひとつの音が重なる。

カナ　なんとはなしに都バスに乗って出かけようとバス停に待ってはみたものの、到着するバスに池袋行きとオレンジ色で表示してあって、あそっちはイヤだなっと思ってやり過ごして、渋谷行きに乗ってココまできてしまった。（間）ナンパされるほど不愉快マックスな出来事はないのだけれど、きょうはわたしがナンパを仕掛けてみたってイイ。イイんだ。ヒトなんて、だれもがめんどくさいんだけど、なるべくめんどくさくなさそうな、手頃な相手を選んで、あと腐れのない関係を探してみたっていい。だけど、この交差点に来てしまったことが、すでに、いまでもあのヒトの残像を求めている、そのことの証（アカシ）なので、だれも求めない。

虚空の、ある一点を見遣る。やがて、

カナ　カレの姿を思い浮かべては、想いを馳せる。恋人の残像に繋がってくれるナニカがほしくて、求めていて、来てしまっていて、わたしのこころは、むかしの相手を想うことで満たされて、満たされてしまうんです。

カナ、その一点を見ている。いつまでも。

外・渋谷のスクランブル交差点⑤（夕）

音楽の中、ひとつの音が重なる。
見上げているトモコ、ふとスマホを出して画面を眺める。

トモコ　ライン。写真つき。（見上げる）あーたしかに赤い。（スマホに）相手がキ

レイと思って送ってくる写真には、ステキねって返せば相手がよろこぶ。寒いね、には、寒いね。あったかいね、には、あったかいね。この返答法を「ポニョ」戦法と呼んでいる。おなじ空をみています。早くお会いしたいです。本音じゃないことを平気で書いて返信した。歳がふたまわり上、おなじイノシシ年のオトコ。全部おごってもらって朝まで過ごす。一緒に歩くのは、好きじゃない。歯医者に居てほしくないオトコ。アーのクチに、あの指が突っ込まれてくることを想像するとゾクゾクする。(間) 手を振ってだれかがだれかに合図して、合流して、どこかへ賑やかに出かけてゆく。そのはしゃいだ声に次ぐ声に次ぐ声に次ぐ声に次ぐ声に次ぐ声を、白々しく聞いていた。ナンパもされない。取材もこない。募金には五回声をかけられた。五回ともおなじ人物の東洋ボーイだった。

スマホを見る。

トモコ　歯医者から(ライン)。…ただ手頃な相手だっていうのに、こんな、なんでもない文字言葉のやり取りが、いまはちょっとありがたいことのように思えた。

スマホを眺めるトモコの前を、浮かない顔のみさきが通り過ぎて行き、去る。

ギャラリー〜渋谷駅前③ (夕)

音楽の中、ミフミがあたりを確認するように見渡しながら、

ミフミ　カイ君は、カメラマン志望の友人の、展示のお手伝いしている。展示の写真のだいたいは、猫ってどうだ可愛いだろ癒されるだろって主張してる作品ばかりで、押し付けがましくて好きになれないらしい。そこまでしゃべる?とか思ったけど、そんなこと、つまらない話の時間の半分も使って、話してくれた。ちょうど今週は借り手がなかったようで、休憩場所として使っていいよとオーナーさんが云ってくれて、それで (ここを) 利用している。あたしには特に使う理由も動機も皆目ないけれど、使わないことが、なにか、折角のご好意に対して失礼な気がして、たぶんそんな気がして、それでカイ君と挨拶を交わすことになった。なにもない空間は殺風景な感じで居心地わるくって、知らないヒト、それも若者という普段あまり接点の持てなくてちょっと苦手意識ビンビンしちゃう男の子と一緒している、この一緒している違和感による沈黙が耐えられなくて、あたしはクチ数が多くなってしまった。(歩き出す) 結婚していないこと、最後の恋愛がウン年前だってこと、その相手をまだ時々思い出しているっていう、恥ずかしいようなことから、ひさしぶりの渋谷は駅前の工事で、道と方角がまったくわからなかったこと、改造計画は結局ビルが建つだけでしょって文句、様変わる渋谷の街景色について。(ちょっと間) 他にもまだあって、奈美恵さんの引退のこと。高校生だった頃、アムラーだったこと。群馬のスーパーモンキーズだったこと。東京のアムラーと互角に戦うため、電車を乗り継いで乗り継いでマルキュウまで通ってたこと。…たのしかったこと。(間) トレンドを身にまとって、まるでナニ

カが変わると信じられて、無邪気にじぶんの目のまえが、未来に伸びてゆくと信じられていた頃のこと、話した。人生の長い時間からすれば、つかの間輝いた、かつて存在していたじぶんのことで、いまとなってはもう、昔話すぎるけど。（間）正直いえば、じぶんでも忘れていたような昔の話を、話し出したことにびっくりした。でも過去の一編の物語が、それでもじぶんの生きた、生きてきた生命みたいなものの証明であることには違わないわけだから、カイ君がふーん、まるで関心の程度の伝わらない反応だった、このことに対して、あたしはちょっと、ちょっと傷ついて、会話の沈黙が怖くて、余計にムダな熱量でペラペラ、ベラベラしてしまった。だけど、さっき、お昼、たのしかったといってくれた。今度はじぶんの番だといってくれた。（間）いい大人とは、ヨユウをみせなきゃいけません。慣れない世代にビクビクではいけません。

ミフミ、スイカを手にして一方へ。
見上げているカナの前を、通り過ぎていく。

外・渋谷のスクランブル交差点⑥（夕）

音楽の中、ひとつの音が重なる。
カナ、虚空のある一点を見続けていて、

カナ　仕事に追われるようになって、カレは次第に色あせた。想い出を、もう昔の濃度で想い出せなくなった。フリーランスでイラストレーターしているけれど、わたしはわたしのオリジナリティーを評価されていない。もらえる仕事をなんでも引き受けて切磋琢磨、相手（クライアント）の要望に応えている。だから、それでも、いつかは、わたしだって、一ぱちの作品を仕上げたい、名をあげたい、ホンモノになりたい。思うものの、ホントに表現したいモノ、わたしだけに表現できるナニカ、ソレがなんであるのか、ある時期から見失ってしまった。（間）カレとの別れを経験して、いかに幸福な出会いであっても、唐突に終わることがあるんだと知った。唐突に。想い返すたび、懐かしさとそれに倍加する切なさと淋しさを連れてくるから、なんであれ、こころに鍵をかけてしまうほかない。なかった。

2013 年 6 月、日本がブラジルワールドカップ出場を決めた夜、渋谷の駅前がサポーターで賑わっているニュースが中継された時、神感（しんかん）のあまり、耳を疑った。テレビから聞こえたのは、わたしの詳しく知っている声だった。拡声器を使った、すこし耳慣れない声音だったけれど、スグにカレだとわかったし、瞬時にわかったといってイイ。ユーモアと機転を交えたアナウンスだった。そのひとつひとつが、カレらしさ、カレの魅力そのものだった。釘付けだった。画面の向こうに向かって手をなんども振った。振っていた。みてるよ。ここだよ。（カレは）気づくハズなんかないのに、手を振り続けた。とうぜん届くハズもなかった。チャンネルを替えてまた見入った。（間）キミはたいへんなところで頑張ってる、でもキミの姿がみれてうれしいよ、とっても。テレビにうつったその横顔は、

わたしが一生そばで見続けていたいって思った横顔だったし、いまも変わらないキミのままだし、キミの活躍はこころから心底、こころの真ん中から心底、うれしかった。「よかったね」なんどもつぶやいた。眠れない夜だった。

虚空のその一点をしっかり見つめる。

カナ　あのあたりだろう。わたしはいま、あの夜の、青い車に立つカレの、その見えない姿をみて、聞こえない声を聞いて、失くしてしまったしあわせだった日々のことを思い出して、頬に涙が大きくこぼれ落ちた。…と思ったら、目薬程度の雨粒だったのでホッとした。まだ泣けるんだ、そう思えて…ホッとした。

外・渋谷のスクランブル交差点⑦（夕）

音楽の中、ひとつの音が重なる。

トモコ　ずっと昔、ここのオーロラビジョン？に映ることを夢みていた。CMはデフォルメされた果物のバナナを頭にかぶった、全身タイツの黄色、複数人でキビキビ踊った。身体元気～♫、テキな。おっきい画面に流れたところで、知り合いでさえ気づくこともない。街を歩くだれかれも、あたしのことを知らない。あたしだけはあたしをみつけてあげたい。だけど、みつけられていない。夢が叶う瞬間…夢が叶ったところで、もう昔のあたしじゃないけれど、でもうれしいか。ただ虚しいか。

トモコ、見続ける。

電車①（夕）

音楽の中、ミフミが歩いてきて、立ち止まる。スマホを見る。

ミフミ　電車の中でメールが届いた。「空キレイですね。検索しましたアムラー。こんなファッションだったなんて。では」。（間）カイ君は気軽にあたしの手元にメッセージを届けてくるから、あたしは…おどろくよ。

スマホをしまい、スイカを出す。あたりを見る。

ミフミ　駅のホームに降りたら、いつものゲリラ豪雨だった。さっきまでの空がまるでウソのよう。傘を持っていなくて、濡れながら急いで帰った。

ミフミ、急ぎ足で立ち去る。

音楽の中、ひとつの音が重なる。

外・渋谷のスクランブル交差点⑧（夕）

カナ　気になって検索して、結婚したことも知った。YouTube に動画も上がってたけどこれには手をつけない。動画はこわい。みマイ。でもそれからも、カレのニュースが届けば、こころのなかで微笑んでは「よかったね」とつぶやいた。2017 年 8 月 31 日、ロシアワールドカップ出場を決めた夜、渋谷のここはあの時と似たような賑わいだったけど、（キミの）姿はなかった。声の掛け方も違う別のヒトだった。…キミにしかできない仕事をして、キミの魅力がまるっとそのまま日本中に届くキミがみたかった。テレビで一方的にみているだけでは、会っていることにならないけど、会いたいと思って（ニュースを）みていたよ。――ねえ。ここに（きて）いるよ？　（見上げる）頬に……大きな雨粒だった。空が暗くて冷たい風が吹いて、これぜったい異常気象ってやつ、としかいいようがない、異変だった。

外・渋谷のスクランブル交差点⑨（夕）

トモコ　夕空は様変わって、あまりの大きな積乱雲で、みるみるうちに暗くなって低くなって雷が鳴り出して、瞬発的ってほど突然すぎる夕立になった。

一方へ歩く。立ち止まって、振り向く。

トモコ　すさまじい雨量に身の危険を感じて、改札口まで避難した。激しい雨が一目散に地面と人間を撃ち続けるサマをみていた。すごいアメだス。
（口早にいう）数年に一度しか発生しない猛雨に、気象庁は「記録的短時間大雨情報」を発表する。もう 81 回の発表があった。去年は 50 なん回、その前 30 なん回。ダントツ今年はヒドイらしい。というような情報を手元でみていたら…電話がかかってきて、待ち合わせの時間をゆうに超えていた。

男が、スマホを耳に入ってくる。

男　いますか。
トモコ　います。改札です。
男　どこにいるんですか。（しかしホッとして）でももういるんですね。
トモコ　はい。
男　なにしてたんですか。
トモコ　なにって、雨がすごくて。
男　雨はひどいです。待ち合わせはそこですか？
トモコ　ちがいます。行きます。あのバス停のそばですね。
男　二〇分も待ってます。寒くなってきましたね。

トモコ　…そうですね。（歩いて）雨のなか待ってましたか？
男　はい（待ち合わせ場所ですから）。トラックにとても大きな水しぶきを叩きつけられました。このまま来ないのかと思うと、こころ細くなりました。
トモコ　はい。
男　あ、またです。
トモコ　？
男　しぶきを浴びてしまいました。まえに銀行があります。入ってもいいでしょうか？
トモコ　銀行？
男　ちょっと下半身が。
トモコ　…着替え買いに行きましょうあとで。
男　はい。あとで。（去る）
トモコ　あの、落ち着いたら場所教えてください。駅前、銀行いろいろですから。

カナの前を通り過ぎ、トモコは立ち去る。

外・渋谷のスクランブル交差点⑩（夕）

カナ　ただやみくもにずぶ濡れながら、ひたすら地面を打ち続ける雨粒たちをみていた。日本中、世界中の傘という傘を破ってしまうような尖った音を立てながら、アスファルトの地面を一目散にただただ雨は打ちつけ続けていた。激しいジェットバスに打たれて、胸の奥にしまいこんだものが溢れ出てきそうだった。けど同時に、もうカレは離れ、ふたりで一緒だった時間は離れ、もう別々に歩いてきて随分が経って、仕事を理解するにもスッカリちがってしまって…時の長さをツウカンする。どうにもならないモウどうにもならない。痛みが痛みで痛みであったため、だれか知り合い、たまたま通りかかって声をかけてほしかった。だれも声をかけてはくれない。傘も差し出してはくれなかった。わたしはひとりだった。

雨の中、ひとりいつまでも立ち尽くし続けるカナ――
やがて無音になる――

シーン3

部屋①（夜）

みさきと敏行の暮らすマンションの一室。
ダイヤルの音が大きく響く。
敏行、急いでスマホを耳に、

敏行　どこ？　え！　もうそこ？　開ける開ける。待ってて。いいから待ってて！

敏行、慌てて玄関に迎えに行く。

敏行　おかえりー。雨大丈夫だった？　もう、駅降りたら連絡してって。いったでしょ？　くれないから、ほら、ケーキもろうそくも真っ暗できなかったじゃん。

みさき、玄関にただ立っている。

敏行　（元気よく歌う）ハッピバースデー、トゥーユー。ハッピバースデー、みさきを祝うバースデープランがある敏行。どんどん歌うが、どんどん歌声がか細くなってゆく。

敏行　（歌うのをやめて）あれ……？　おれ浮かれすぎ……？

みさき、答えずに部屋に入り、敏行から距離を置いたところに立つ。

敏行　あれ……？

間。

みさき　さて。どんなつもりで帰ってきたか、わかる？

敏行　ぜんぜん。

みさき　（憮然として敏行を見る。ウンザリあらわに）オーケー。

敏行　え？　なに？

みさき　帰りたくなかった。

敏行　おれ待ってたよ？

みさき　だから。

敏行　ケーキも待ってたよ？

みさき　いらない。

敏行　トップス。

みさき　大好き。

敏行　でしょー。じゃ、ひとこと。

みさき　ひとこと？

敏行　遠く過ぎ去りし二〇歳、重ねて一〇年、三〇歳の日々へ。

みさき　（考える間あって、遠くの方角にチカラなくいう）人生はこれからだぞーーー。

敏行　（ニコニコしてパチパチして、ハッピバースデートゥーと元気にまた歌う）

みさき　――（見ている）

敏行　（歌い終わってニッコリして）オメデトー、ミソジッ！！！

みさき　……。

敏行　（急に人生の先輩）ま、ひとまわり上のおれからいうとさ、歳ってもんはさ、

みさき　（うる）さい。
敏行　…小言いわせてよ。
みさき　聞っかナイ。
敏行　…じゃ、まずは（ケーキ）食べて、シャワー浴びて、寝ようね？
みさき　はい？　寝ないよ。
敏行　寝ようよ。
みさき　寝ません。
敏行　寝ません、ひっくり返すと？
みさき　寝ます。
敏行　そうそう。抱きたい。ぎゅっと。後ろから。
みさき　……。
敏行　はげしく。今夜こそ。
みさき　……。

みさき、奥（の部屋）に逃げる。

敏行　…え、まさか、もうさっそく？

はしゃいで追いかける敏行。奥（の部屋）に消える。
と、すかさず激しいスプレーの音。

敏行の声　わちょわちょわちょわちょよよよよ、、、
みさきの声　（音に声も重ねて）シャーーーーー、
敏行の声　アやややややや、わちゃわちゃああ、、、
みさきの声　シャーーーーーーーーーーー。（スプレーをやめる）
敏行の声　（ゴホゴホ、と咳こみ）ゴキジェット……。（ゴホゴホ）

もちろんゴキジェットは人に向けて噴射してはいけない。
みさき、煙を吸入したのか、同じく咳き込みながら、戻ってくる。

みさき　噴射すごっ。

敏行も戻ってくる。まだゴホゴホしている。
ふたりの咳き込みが落ち着いてから、

みさき　さて。うん。気絶するまえに、ここ座って。
敏行　……

敏行、素直に正座する。態度は急におとなしい。
みさき、カバンから区役所の封筒を取り出して、敏行に差し出す。

みさき　しかるべきところ記入して。

敏行、黙って受け取る。
みさきは封筒の中に離婚届を入れておいた（と思っている）。
敏行　……？
が、封筒から取り出すと、履歴書が出てくる。
なぜ履歴書を渡された？という思いの敏行……考える。
みさき、その困った様子の敏行を見ていて、落ち着いていう。
みさき　うん。わたしだってこんなふうになるなんて思ってなかったよ？　じぶんは、じぶんを裏切るものなのね。
敏行　（声を出そうとするが、うまく出せずに）……
みさき　…？　なに？　これアースジェットだよ？
一瞬の沈黙。
わからない説明はさておき、敏行は履歴書を見ながら考えて、やがて、
敏行　（履歴書に呟く）こういう日が来るとはねえ。
みさき　ほんと。
敏行　またあたらしく見詰めましょうですね？
みさき　はい？
敏行　ま、はじめますね。（面接の調子で）杉原みさきさん。二十九歳ア、ちょうど今日で。おめでとうございます。
みさき　…はい。
敏行　住所、連絡先、この辺はまああれとしてあれ、あれれ、ご結婚はされていないようであれれれ。
みさき　はい？
敏行　まあ、飛ばして。趣味が芸術鑑賞。芸術鑑賞？　プッ。
みさき　なにか？
敏行　いえいえ。アやっぱりココ、重要ですね、今回志望された動機ですね。
みさき　ふざけてる？
敏行　いえ。いえいえ。お聞かせいただけますか？　やはり弊社としては、
みさき　へいしゃ？
敏行　志望の動機。空白だよ？（履歴書を見せる）
みさき　アーーーッ。
みさき、勢い駆け込んで、勢い奪い取って、離れて、ぴょこんと立つ。
敏行　転職？
みさき　関係ない。
敏行　既婚のところ。

みさき　関係ない。
敏行　あの……なんで？
みさき　いちいち話せることじゃない。話し合うことじゃない。
敏行　大事じゃん。いまこそ。

間。

みさき　わたしね、
敏行　うん、
みさき　親知らずが痛いです。親知らずの奥のほう、奥歯の奥の場かな、そのへん。
　疼いて痛いんです。二年もう。ねっとり痛い。母になれるかもしれない、母としてのわたしの姿、そういったみえない可能性の「影」が疼いてる。痛みが育ってる。だから。
敏行　……だから、頑張ろうよ？
みさき　（バッカヤローッ！の思いみなぎって）痛くって疼いて痛くって疼いて痛くって疼いて痛くって疼いて痛くって疼いて痛くって痛くって痛くってしょうがないんだっ！！！
敏行　……。
みさき　――
敏行　……めんどくさいくらい向き合ってるし、頑張ってるよ？
みさき　めんどくさいくせにどお？　その結局どお？
敏行　だから……どうしてかなって思ってるけど…、
みさき　ふたこすり半！
敏行　……頑張ってるよ？　…不満か？
みさき　……。（不意に立ち去ろうとする）
敏行　え、どこ行くの？
みさき　（立ち止まる）出てく。
敏行　え、あ、じゃ、送るよ。
みさき　……は？
敏行　送る。え、どこ行くの？
みさき　ハーーーーーー。（とてもガッカリして立ち去る）。

間。

敏行　え、……三行半？

　急にチクリチクリと股間に激痛のような痛みが走りはじめる。

敏行　あうぅ…え？　アウゥ…え、え？　あれ？　えええ？

　痛みがさらにひどくなって、顔が歪み、うずくまり、苦しみ始める。

敏行　はうう、おうぅ、、（しかし痛みに耐えながらいう）痛いところをつかれたこの状況でおれの局部が痛い…おれの大事な局部が痛い…肝心なとき頑張れないくせにいま痛い……ナゼ？（激痛が走る）ハゥう、、、痛い、、、痛い…けど、頭を使って考える……けど、身体のドコで（人間は物事を）考えるのだろう、一体？…頭？　脳？　ハート？　ハゥううう、、どれも取りはずして考えたことがナイから、頭や脳みそが考えてるかどうか、細胞の一つひとつが束になって考えてるかどうか…わからないヒィイッツ、、、、あっちは奥歯の奥の場が痛いといった……歯医者に行けばいいのとちがうのか？　アえっ、、あっ、、（おれの局部のこの痛みは）一体なんだ？？？（さらに激痛）はあうぅ…（痛すぎる）……（みさきのいなくなった方角に）ねえ！　痛いよ？　痛い！　すごい痛い！　ねえ？　さすってくれない？　痛いんだ！　ねえ！　さすってくれない？　おーい、一緒にさすってくれない？　おーい？　（チカラなく）…おーい…おーい……（か細く）おーい……

返事はない。
ひとり、痛みながら、うずくまる……。

純喫茶（夜）

トモコと男、向かい合って座っている。
店内の音（賑わいは三分の入り程度）。
すこし長いと思うくらいの間があって、

トモコ　てっきり…連れ込みに行くもんかと思ってました。
男　古風ないい方ですね。
トモコ　ことばを選んだんです。こういうところなんで。
男　わかってます。
トモコ　コーヒー済ませてもまだ話すんですか？
男　話をする以外に、なにを思い当たります？
トモコ　まあ（いいです）。なにを話すんですか。
男　あなたのことを知りたいと思って。
トモコ　調査ですか？
男　興味です。関心です。あなたももし興味があれば聞いてください。
トモコ　こうして（メンと向かい合って）ですか？
男　歩きながらでもいいですけど。雨ですから。（外を見る）
トモコ　……

すこし長いと思うくらいの時間が流れる。

トモコ　あした、お仕事なん時からですか？
男　なん時でもありません。

トモコ　……、…、おやすみですか、歯医者さん？
男　ぼくが歯医者ですか？
トモコ　はじめまして、で歯医者さんと。…あれ？
男　……たぶん。退社しました、といいましたが。
トモコ　歯医者じゃないんですか？
男　印刷会社に勤めていました。
トモコ　（とても安心する）
男　どうして、ホッとするんですか？
トモコ　だって、あれ（帽子）と、あれ（マスク）してあんな、（と笑いだす）
男　いま、失礼なことといわれてますか？
トモコ　かもしれません。
男　……。
トモコ　（失礼しました）でも、いまちょっと笑ってもいいですか？
男　もう笑ってます。
トモコ　はい。
男　歯医者は苦手です。
トモコ　あたしもです。しばらく行ってません。
男　なん時からですか、あした仕事は？
トモコ　お昼です。
男　じゃあ、午前中、一緒に歯医者にいきますか？
トモコ　…誘い合って行くところじゃありません。
男　なんだかクチが気になってしまいました。
トモコ　みせてあげましょうか、鏡持ってます。
男　困ります。マスクありますか？
トモコ　マスクはいえ。
男　……
トモコ　……

長いと思うくらいの間。

トモコ　会話。止まっちゃいましたね。なにを聞きたいんですか？　質問してください。

間。

男　あなたはしあわせですか？
トモコ　パス。宗教のカンユーですか。

間。

トモコ　結婚してるんですか？
男　それは、いまは答えたくありません。

トモコ　…それ、答えてません？
男　いいえ。答えない、という答えです。
トモコ　……

間。

トモコ　（会話）止まっちゃいました。
男　ありふれた質問ですけど。きょう、なにしてましたか？
トモコ　駅前にいました。じぶんが出たCMが流れるっていうんで。べつにスマホでもみれるっちゃみれるんだけど。
男　CM、すごいですね。
トモコ　ま、みれなかったけど。夢だったから、渋谷のオーロラビジョンに映るの。
男　どんなCMですか。
トモコ　バナナのかぶりモノが踊ってます、大勢で。
男　……
トモコ　三時間以上粘ったんだけど。
男　みれなくてよかったじゃないですか。
トモコ　ですか？
男　随分ちっぽけでガッカリしたと思います。
トモコ　（いろいろあって）みたかったんです。
男　また頑張ればいい。
トモコ　まあそうでしょうけど。
男　また頑張ればいい。
トモコ　…まあそうでしょうけど。
男　芋粥ってわかります？
トモコ　おかゆです。
男　物語です。芥川。
トモコ　…はい。
男　年に一度だけの芋粥を飽きるまで食べたいと思っている男が、こころゆくまで食べさせてやるという誘いに乗って京の都から越前の国へ、翌朝にはたくさんの芋粥が待っている晩、こんなことを思います。そう早く食うときが来てはいけない、辛抱が無駄な骨折りになってしまう。事件でも起きて芋粥に容易にありつけなくなってくれたらと。
トモコ　はい。
男　叶えたいと願いつつ、叶わないことが、じぶんを見失わないんです。みなくてよかったんです。充たされるか充たされないか、わからない欲望にヒトは生きています。
トモコ　……
男　ぼくみたいな消極的な人間には、あなたは芋粥です。
トモコ　ンる？
男　まあ、少しイヤらしいサイトで知りあった。会って話した。ぼくにためらいがあって、その日が終わった。メールのやり取りが間隔をあけずに続いて、また会

ったらすぐホテルだった。
トモコ　なにか。
男　あなたの裸をみたいと思っていた。どんな裸かと想像していた。この目で確かめられた。叶った。お腹をポンポン叩かれた。それはいい。だけど、ぼくに関していえば、あなたと会うまでの時間がこころを弾ませた。これが欲しかったものでした。あとは虚しかった。あの行為は一体、なんでしょう。愛とも、ひとりの孤独を埋めるとも違った。無益だった。…芋粥の主人公です。
トモコ　だから（こんなふうに）おしゃべりですか？
男　（答えず）…あの夜はなんだったのでしょう？
トモコ　持て余した性欲を、お互いの身体を使って解消しただけです。
男　……
トモコ　（いうかいわないか迷う間あって）あたしには、あなたがだれであっても構いません。だれかであっては、むしろ困ります。他に四人います。三ヶ月連絡取ってないのが二人ですけど。こころも身体も全部うっとりやれません。どうか手頃な相手でいてください。
男　……
トモコ　ここに（ふたりの間）にあるのは、欲望への興味と関心です。でしょ？
男　…身も蓋もないことをいえば、相手はだれだっていいってことですね。
トモコ　はい。
男　…おどろきません。生きるとは、限りなくモノねだりです。遊ぶことと愛することは、ちがうんですから。でも……、
トモコ　はい。
男　（質問の調子で）あなたは愛を知っていますか。
トモコ　（鼻で短く笑って）あの。
男　はい。
トモコ　身体、ウズウズしません？
男　厄介なことを聞きますね。
トモコ　ホテル街、歩きましょう？
男　……

静かに小さく音が入る――

シーン4

外①（深夜）

車の行き交う音がすこし聞こえる場所。深夜。

みさき　（気持ちを隠して語気強くいう）メール、あなたへ――。あなたへ、なんて書くと、あなたへの愛があるように感じられてしまいますが、ありません。今夜は帰りません。誘ってくれた映画「ブレーブ・ランナー」ですが、観に行きま

せん。あなたはとても残念がることでしょうが。（わたしは）ハリフォン・ソードがわかりません。観たいものを選びます。ゴメンなさい。みさき。

間。

みさき　いろんなキモチをもれなくつかまえて、まとめてくれる、丁度イイことばがわからない。もくもくしたおっきな雲が、漢字ひとつの「雲」におさまってしまうのがおかしい、そんなように、オンナごころは不思議なもので、理屈のとおらないことがある。（標語のようにいう）「完全な他人。別れたらみないようにしなくちゃならない、お互いに」。…通りすぎた駅みたいに、また引き返すわけにはいかない。…戻そうって気になったら…（戻れてしまうから）…だから完全な他人……

思いを振り払うように一歩二歩、踏み出す。止まる。

みさき　夜のホーム。次が最終。さっき駅員が伝えに来た。ムシャクシャしての自殺を警戒してた。頼り甲斐なさそうなオトコだったので「誕生日なんです今夜」いってみた。それはおめでとうございます、三〇歳、寂しいですね。古本屋のようにいわれた。いまはあの監視カメラの向こうでジッと観察してる。（間）みえない監視カメラのようなモノが、わたしの日々を冷たく静かに見据えている。時というのは味方じゃないから、くだるのか登るのかわからない三〇代という坂を、やっぱり登るのか下るのかわからないで過ごしてたら、いつの間にか四〇（しじゅう）にエスカレーターするし、奥歯の奥は疼いて痛いし、ぐずぐずしてたらオンナはふやけてしまうし、生涯一度きりの若さがいまのままでいい気がしないし、いいたいことといい放ちたくても友達も少ないし、母に電話したらなかなか出ないし、七回目で出たけど、速攻で寝落ちて、役に立たない人生の先輩だったし…鎌倉かなんかのダイブツをイイ顔ねっていえちゃう、関心もないのに庭いじり始めちゃう、そんな、そんな日が迫ってくるのが「こわい」です。

間。

みさき　（語気また強く）メール、あなたへ――。先読みしてさらにいえば「スター・ウォーズ」も行きません。ゴメンなさい。夜はエッチな動画をおたのしみください。みさき。

大きく息を吸って。

みさき　ふぅー、いってやった。いちおうは人妻であることを忘れて、だれづまでもないひとりになって、まったくちがったわたしでほっつき歩いて、ヨクボーは外側からやってきて人間をドライブさせるから寄ってくるなら乗っかって、乱れに乱れてビュンビュンしたい、勇敢に。（わたしは）ブレーブ・ラン（と言いかけて、ちょっと考えて）その日暮らしのアリエッテイになるっ。

電車が入ってくる音が徐々に遠くに聞こえる。
そこにダイヤルのような音が重なる――

部屋②（深夜）

深夜。ダイヤルのような音が響いている。
敏行が床に寝転がっている。仰向けである。

敏行　ひとりぼっちの部屋に、意味もなく寝転んで、天井をじっとみつめていた。窓からさしこむ外の、街の外灯が、おれを淡く照らして…まるで光のプールに浮いているような錯覚を感じた。静かな雨の音が聞こえた。

うつ伏せになって、床をぼんやり見る。

敏行　光のプールで、みさきとの出会いを思い出して、つくったすべての思い出が、痛みに変わるのは耐えられないと思った、ら、また痛んだ。（股間をさする）……さっきのメールに、なんじに帰る？　嫌味なメッセージをつくって、送らなかった。…ブレード・ランナーだよ、どうでもいいけど。…ハリフォン・ソードって。（間）現実味を欠いた音のように響いて、耳覚えのない音で、なにかのモノオトと感じなくて、匂いのような嗅覚をつついてくる音で、これがダイヤルとわかるまで、時間が長くかかった。

ミフミ、いつの間にかいて、スマホを耳にしている。

ミフミ　（声をひそめて囁く）寝てた？
敏行　――懐かしい声だった。こういう、こころの隙間をついてくるタイミングは、どういう巡り合わせなのだろうと思いつつ、出てしまったのだからしょうがないと思って、電話――

敏行、スマホを耳に当てる。

敏行　なにかあったんだね？
ミフミ　ううん。そんなんじゃないの。
敏行　いま、
ミフミ　十二時過ぎ。
敏行　そっか。
ミフミ　おっきい蜘蛛が出て。すぐそばに。
敏行　クモ？
ミフミ　そう。
敏行　あの、黒いカニみたいなやつ？

ミフミ　そう。カニとミツバチ掛け合わせたような。
敏行　ヘテロ結合。
ミフミ　こんな大きいの。
敏行　みえないよ。電話だから。
ミフミ　こんななの。
敏行　ことばにしなきゃ。
ミフミ　聞きたい（大きさ）？
敏行　…ううん。
ミフミ　もう家中バタバタ。お母さんお父さんもうボケちゃって、ぜんぜん昔のような冴えナイわけ。夜中の蜘蛛は放っておくほうがいい。ノーテンキなの。
敏行　退治した？
ミフミ　やった。窓まで誘って、シューーして気絶したとこ掴まえて。逃した。
敏行　シュー？
ミフミ　ゴキジェット。
敏行　……ああ。
ミフミ　グロテスクな生き物ってかわいそうね。
敏行　……。
ミフミ　それでね、
敏行　あれはあれで精一杯生きてるんだよ。
ミフミ　あそお？　でね、蜘蛛やっつけて、ホッとして、布団入ってもまだいるんじゃないかって、天井や壁、用心し始めたら、寝られなくて。それであなたのこと思い出したの。
敏行　…それでって？
ミフミ　蜘蛛って、お釈迦様の遣いって。いってた。
敏行　夜の蜘蛛は親でも殺せともいうよ？
ミフミ　いい方を覚えてる。
敏行　……（やっぱり）なにかあったんだね？
ミフミ　（間あって）そうね。蜘蛛。とびきりの。
敏行　唯一の善い行いは蜘蛛を踏み潰さなかったカンダタは。それで、一本の細い糸が地獄に垂れてくる。けどお釈迦様は悲しい顔になる。
ミフミ　カンダタ。
敏行　ううん。カンダタ。
ミフミ　うん。カンダタ。フフ。
敏行　――電話のそれからは、なにしてたのと問われ、込み入った状況でうまくことばにするのが難しいと答えた。眠れないところをちょうど電話もらったんだ。ずっと起きていた。まるでこの電話を待っていたのかもしれない。
ミフミ　うん。
敏行　――雨の音が聞こえて、それからいった。
ミフミ　あなたに連絡しようかどうしようか、ずっと迷っていた。元気そうね。

音楽――
間。

ミフミ、いなくなる。

敏行　（耳からスマホを離して、間あって）不思議なことが起こるもんだと思った。なんでもないことかもしれないけど、なんでもナクないことのように思えた……。

敏行、股間に手を当てる。さすってみる。
じっと触ってみる。痛みの感触を確かめるような手つきを続ける……。

電車①（深夜）

音楽の中、カナが座っている。
電車が走っている（ような）音もかすかに静かに聞こえている。

カナ　ニューヨークは地下鉄が二十四時間走っている。ロンドンでもおととし二十四時間営業になった。終電車なのにひとりの山の手線。内回りか外回りかわからない空っぽの車両は、意外と広くって、せっかくなので、ひとり、おっきく歌、うたったりした。…一層こころ細くなった。止まる駅止まる駅、だれも乗ってこないので、わたしのために電車は動いていて、いつもとおなじ路線、いつもとおなじ景色、いつもとあまり変わらない速度で走り続けていた。…もうこのまま、どこかちがった場所に連れてってくれたってイイよ？　ナニカ歯車が崩れて、この世界に張り巡らされた網目と網目のあいだから、わたしひとりこぼれ落ちてしまって、知らないセカイに連れてゆかれて、深い眠気が襲っていつの間にか眠ってしまって、目が覚めて、アレレわたしどこにいるんだろうって慌てて、見渡して、まったく知らない場所にいるンっていうアノ、冷たい汗の流れるアレ、みたく知らないドコカへ。（間）バアーッと鳥肌が全身にたつ。脱線の特質は、またもとに戻ってくることなんだっ。…ヒトって相反する矛盾をはらんでヤッカイだ。駅に降りて、いつもの道を歩いてアパート、鍵を鍵穴に差し込んでいつもの暮らし。だれも知らない網目の向こうのセカイなんて、ナイ。調子ハズレな空をみたって、ありえない降水量だって、変わり映えのない夜に戻っていつもの姿で回っている。たとえいまもし、グーグルマップのグーグルアースの3Dにあるような、道路や建物にヒトや車が半透明の影になって溶け込んでいるアノ、生きものがいるようでいないような、アノ廃墟のような世界を、この電車が走っていて、ひとり、わたしだけがいても。波ひとつない湖の海を走る、千尋のあの電車のシーンみたいに走っていても。（見渡す）カオナシいないし、身体半透明な乗客もいない。…わたしひとりだけの世界は広すぎる。車掌さん、いるか確かめてみたいけど、答えがこわい。

電車が走っている（たしかな）音が静かに聞こえてくる。

カナ　「東京NOBODY」という写真集がある。都心の繁華街、たとえば新宿銀座渋谷、ヒトがいない瞬間を撮った、東京が廃墟のような写真集。真っ青な空、自

然光のグラデーション、青みがかった冷たさが美しい東京のビルは、冷酷だけど、ひとつひとつのビルディング（ビルの複数形のようにいう）から、人間らしさの温かみが伝わってきた。本来いるべき生きものがいないと、建物や物体が「そこ」にいるって目が行き届いて、無機質にみえていたビルディングは、実はそうじゃないって気づかされる写真集だった。都市計画なんて、ビルがどれも自分勝手な都合で建てられてまったく協調性なくて、でも作った人間たちのせめぎ合いというか浅ましさというか、なんかそういうところがみえてくるようで、ビルってけっきょくヒトの匂いみたいなものがこびりついて染み付いて、冷たいようで冷たくないんだなーなんて思った（写真集だった）。（思い出して微笑む）ギャラリー展示でサインもらったあの写真集、どこに片付けたっけ。ギュウギュウに賑わうギャラリーで、キミは苦手といって ロビーで静かに待っていた。いまじゃ、あれだけの無数の人間に向かって、「ことば」を届けている。（間）運はヒトの手に負えるものじゃないけど、お互いに影響しあって、ともに成長できてた頃がそぞろに懐かしい。警官になってキミがひとりでどんどん成長してゆくと、わたしを不安にさせた。じぶんが劣っているとじぶんを刷り込んで（しまい）、うまく付き合えなかったよ……

電車が停車に向かって行く静かな音。
一方からみさきが、歩いてくる。
電車が止まる。ドアが開く音。
みさき、電車に乗り込む。

カナ　！！！

みさき、カナから離れた席に座る。
電車が走り出す。　間。
カナ、みさきを見ている。まるで、おばけか人間か、見定めるよう。
みさき、視線を感じ、なんとなくその方を見る。

カナ　（パッと目をそらす）
みさき　……
カナ　（横顔を向けたまま）――
みさき　……（視線を戻す）

カナ、またみさきを見る。
みさき、不意を突くように、パッとカナを見る。

カナ　（いきなり見たのでちょっと慌てて、目をそらして）――
みさき　……（視線を戻す）

やや間あって、カナ、またみさきを見る。
みさき、カナを見る。

カナ　（見ていて）――
みさき　……。（視線をそらす）

カナ、見続けている。

みさき　……。

みさき、またカナを見る。

カナ　（見ている）――
みさき　……。

みさき、視線をそらす。そしてまたカナを見る。

カナ　――（見つめている）
みさき　……。

みさき、視線がうっとうしい。
おもむろにカバンからタオルハンカチを出す。
そしてカナに向けて、とうとつに、豪快に、投げつける！

カナ　！！！

が、ハンカチは空中で失速し、ゆるゆると床に静かに音もなく落ちる。

みさき　……。
カナ　……。
みさき　……。

みさき、格好わるいが、ここは黙って拾いに行く。
拾うと、カナに近づく。
そばまで近寄ると、ハンカチを差し出す。

カナ　……？

みさき、カナによくわからないジェスチャーをする。

カナ　？？？

みさき、ジャスチャーでわからせようとつとめて、さらに身振りが大きい。
濡れてるから使ってどうぞ、と伝えようとしている様子……。

カナ、ようやくわかって、お辞儀して、受け取る。
カナは身体や髪を拭く。雨に濡れていたので拭く箇所は多い。
みさき、やがてタイミングを見計らっていう。

みさき　ね？
カナ　？
みさき　泊めてくれない？
カナ　！？

カナ、ハンカチを綺麗にたたんで、みさきに差し出す。

みさき　……。（受け取る）

みさき、カナから離れて、席に戻る。
間。
電車の走行音が静かにまた聞こえ始める。
間。
不意にカナが立ち上がる。

みさき　……？

カナ、みさきに近寄る。

みさき　？？？

カナ、みさきの隣に座る。

みさき　？？？
カナ　（無言のまま座っていて）――
みさき　……。

カナ、みさきに身を寄せる。

みさき　？？？

カナ、みさきに頭を預ける。

カナ　――（じっとしている）
みさき　……

みさき、カナの肩を抱く。
カナ、さらに身を寄せる。

みさき、しっかり抱き寄せる。

ふたり　――

ふたり無言のまま。
電車は進んで行く。
じわじわと音楽が入ってくる――

長い間――

音楽の中、カナが立ち上がって、去っていく。
音楽の中、やがて、みさきも立ち上がる。
ある方角（日差しが差し込む方）を見遣る、みさき。

外②（早朝）

みさき　店員に朝五時を告げられて、さらわれたくてありあまっていた時間は終わった。こころに頭に圧倒的に支配してたアレコレはみょうに軽やかで、歩きながらふたりでデタラメに歌をうたって、反響する地下の歩道の声に、これはじぶんの声じゃないぞーと、腑に落ちるまでアアアアアーーー叫び合った。みっともないぞ、そのへんの猫がニャロメの目で睨んでた。駅の始発に向かう道、あの子にいわれた。負けるなよ。息を大きく深く思いっきり吸い込んで、わたしはマダ開けない明け方の空を仰ぎみた。（自分に染み込ませるようにいう）負けるなよ。（思い返していう）船から沖に向かってオーイするように大きく手を振って離れていった姿に、がんばるよと誓った。

音楽の中、みさき、去っていく。

2　つぎの日のこと

シーン1

外（朝）①

ミフミが不安であたりをキョロキョロ見回している。

ミフミ　午前一〇時。迷子になっている。東急東横線が副都心線との乗り入れを開始して以来、渋谷の駅はひどい迷路になった。案内表示の色と矢印をキチンとみないと迷子になる。フト、地元の商店街のお店を思い出した。「新聞手芸金物お団子将棋麻雀カラオケ」そう看板に掲げて、お店の意識の向かうところに一貫性がなくて、無節操に手広くやってしまったアノ拡散っぷりのお店。でも、そんなふうに、なんとなくこれとなくこころの進むまま、気もそぞろに生きてゆくのが人生かもしれない。緑、紫、黄色黄緑、オレンジ茶色、ピンク。付け足して付け足して、つぎはぎだらけに無節操に広げて生き残ろうとする渋谷駅は、商店街のお店だ。16 b 出口がわからなくてカイ君に電話をしてしまった。お昼――。

青年が、入ってきていて、椅子に座っている。
場面は変わってギャラリー五階、翌日、お昼ご飯を終えたあとの時刻。
ミフミの背中に、青年が話しかける。
ミフミ、振り向く。
青年、馴れていないが、なんでもないことのように話してゆく。

ギャラリー（昼）

青年　深夜にコンビニでバイトしてるとですね。
ミフミ　え？　寝てない？
青年　いえ、7時までなんで。ちょっと寝てここ来て、そのまま朝（まで）です。
ミフミ　へえ。頑張るのね。（座る）
青年　おれ、就活やらなかったから。ずっと家にいるってわけにもいかないし。
ミフミ　でも深夜？
青年　なんでもいいだろうと。
ミフミ　若いうちなら。フフ。
青年　夜中、ずっと雨だったじゃないですか。あんななか、傘さして、わざわざ買い物しに来るヒトって、それでもいるんです。
ミフミ　うん。商売しょうばい。
青年　まあ。（でも）おれんトコ、駅のそばってわけじゃないから、深夜それほど利用者多くないんです。あたりに暮らしてるヒトが寄るってくらいの。駐車場もない。もともと個人経営だった店がフランチャイズして、いまは大手の看板つけて

るけど、そこらへんに同じ系列はぽんぽんあるから、潰れるのもそんな遠くないような。そんな、あんまパッとしない店で。
ミフミ　うん。
青年　傘持って、お店に入ってくるから。
ミフミ　お客？
青年　はい。床ドボドボで。傘は傘立てにお願いしますって、レジからいったんですね。
ミフミ　うん。
青年　オマエが掃除すればいいだろ。
ミフミ　うん。
青年　で、商品持ってきて、財布からお金投げるように放って、余計なクチ聞くんじゃねえよ。去ってった。
ミフミ　ひどい感じ。
青年　文句いわれる筋合いナイんだけど、まるでじぶんが間違ったみたいで。
ミフミ　そういうヒト（もいるよ）。そう発散して気をまぎらしてる（ヒト）。
青年　こっちも時給がいいってだけで、深夜選んでるだけだけど、けど、ありがたみって、なんだろうって（思って）。
ミフミ　ありがたみ？
青年　明かりって、ヒトをホッとさせる、そんなチカラがあるんです。夜中、コンビニの明かりがあって、自動販売機の明かりがあって、街灯もだいたいちゃんとついてて、いたるところあるから、あんま気にしてないけど、もともとは真っ暗なわけで。
ミフミ　うん。
青年　ずっと田舎にひとりで旅行に行ったとき、山道から抜け出せなくて、カーナビもまだ着かないって教えてて、こころ細くなったんです。きりがない真っ暗い道を走って、走って、走ったら、ひとつの明かりがやっとみえて。自動販売機だったんですけど、なんかつい、車止めて。ホッとしたんです。
ミフミ　うん。
青年　光のもとで、ヒトはヒトと結びつき合っているもんなんですよ。たとえばひとり、深夜、どうしようもなく暗い方向を考えて、抜け出せなくなった時、なんとなくコンビニに行くじゃないですか。欲しいものとか特にないのに。アレって、無自覚なところで、だれかに助けを求めてるんです。だれかに助けを求めていなくたって、コンビニに来ることで、すこし気持ちが救われているんです。雑誌立って読んだり、ビール眺めたりするだけでも。コンビニは自販機じゃない。ヒトがそこにいて、ヒトが来て。だからナニカ起きたっていいんじゃないかな。たとえば、常連さんなら、挨拶を交わすとか。雨すごいですね。タオル貸しましょうか。なんかヒトに触れた、あったか味。知らんぷりしないで、引き止めて、図々しくおしゃべり。コーヒーどうですか。眠れないんですか。
ミフミ　意外。
青年　まあ。
ミフミ　実行した？
青年　いえ。勇気がないっていうか度胸がないっていうか。

ミフミ　しなきゃ。やりなよ。こうだって思うんだったら、やらなきゃ。相手ねだりじゃ、なにも変わらないよ？
青年　（間あって、苦笑する）
ミフミ　おかしなこといった？
青年　うれしいんです。そういってくれるんだなって。
ミフミ　（だって）そうでしょ？
青年　やれてれば、話しませんこんなこと。それに…店員になって半年も経っちゃうと、深夜のひとりふたりで過ごす時間がむしろ気楽でイイなんて思い始めてる。入荷の陳列はお客に邪魔されたくないと思うようになってる。ホッとしたいお客はドンキホーテ探せとさえ。まずはじぶん自身から変えていかないとです。……ここの手伝いだって、ちょっとそういうところ、鍛えられるかなって思って。でも、なんでもない世間話にはやっぱり疲れてしまうんだなあなんて。あなたと喋ってホッとなんかして。（寂しく自嘲）
ミフミ　……

間。

ミフミ　応援する。やりなって。
青年　……はい。
ミフミ　約束。行くよコンビニ。偵察。抜きうち。
青年　…困ったな。
ミフミ　応援します。
青年　（間あって、見て）はい。

間。
青年、ひとりごちるようにとても小さく、

青年　変なことしゃべっちゃった……。
ミフミ　ぜんぜん。
青年　だれにもいわなかったもんだから、だれかに喋りたかったのかもしれない。

目を伏せて、薄く苦笑する――
ミフミ、フフととうれしくて微笑む――

トモコがスマホを手に、入ってくる。
場面は変わってトモコの部屋。夕方。

シーン2

部屋①（夕）

トモコ、スマホのボタンを押す。
スマホの画面に向かって、いう。

トモコ　一途だった相手に浮気されて、どういう気持ちで浮気するのかわからなかったし、知ってみることが相手を理解することと思って、いっかい適当な相手に「奪われ」に行ってみることにしたんです。腰に手を回された時、思わずビクンとなって、相手が手を引っ込めたので、あたしから身体を近寄せたら、あ、奪われに行ってるなって思って、下着を脱がしてもらったら、あ、奪われようとしてるなって思って、たくさん触ってもらったら、それが欲しかったのもっと欲しいくださいってなって、アレ？罪悪感ぜんぜん膨らまないぞっ、相手に侵入されるのもぜんっぜんっ、受け入れられるぞっ。目の前の男が汗かいて、やっきに腰動かしてあたしを求めて欲しがって、そんなに一生懸命になってくれる相手がいるもんなんだ、へー。うれしくて、必要とされてるって、なんかホッとできるカンジ、感じた。もっとちょうだいもっと、なんて、欲しい欲しい、モノねだり屋さんになってった。求められることで、安心を保てるようになって、一途な相手に浮気されている不安におびえなくなったし、そっけなくて淡白な態度に傷くのもへーキになれた。あたしの毎日はいろんな相手ができるようになって、今日のあたしはこのオトコ、あしたのあたしはあのオトコ、そんなふうに思って過ごせるようになったら、(一途な相手に) フラれる不安も嫉妬も怖くなくなった…なりました。
気持ちがないぶん、セックスが上手くなった。相手をただのモノだと思えば上手くなる。身体は気持ちとは別個の生命や意志を持っている。もしかしたらこれは獣の歓喜の味わいなのかもだけど、身体はフシギなチカラを持っている。オトコとオンナ、相手のことわからなくたって、愛情とは別の異質な欲望？によって結びついてしまえて、相手の数が増えれば増えるだけ、それに耐えうる身体を、身体のほうが調整するから、生命力はむしろ、みなぎる。雑草のアスファルトに咲く生命力みたいなものが、実は身体に宿って逞しくなった。比例してでも、孤独のようなものに対する忍耐はなくなった。……なにを話してるんだろう。

やや間。

トモコ　笑ってしまったことゴメンなさい。心を入れ替えるとか、やりたくてもむずかしいですけど、あたし、また会いたいんです。

スマホのボタンを押す。

トモコ　あの晩、身体を合わせたまま天井をみつめて、それ以上のことはなかった。時間が経って、ひとりになって、質問に答えたくて、されてもいないけど、イノシシ年の彼に知ってほしくて声を録る。文字だと重いから。バス停でまた。いつでもいいので。送信。――こころにすこし近づけたあたしの声をどう聞きますか。本当は怖いんです。向かっていく相手、他にいるのに避けて、まぎらして生きて、みじめに発散してるじぶんが怖いです。肝心なとこ避けて、まぎらして生きて、

いろんなこと、かえってどんどん白けてゆくんで怖いです。なんでもない返事でもいいからください。ください……。

ポキポキッ！、ラインの音。

トモコ　えはやっ。（スマホをいじる）大学の友人か。へー、すれ違ってたかもなんだ。渋谷こわいな。（返信をつくる）ふたりはいまどうしてますか。…もしものことがあると意地悪い。返信しない。（昔を思い返す）……大好き、をまっすぐいえる彼女が、遠巻きにみてたけど、羨ましかった。思い出されてくるあの子はいまでも笑っている。

思い返しているトモコの後ろに、カナが入ってきて、椅子に座る。
場面は変わって、カナの部屋。夜。

部屋②（夕）

カナ、部屋の白い壁を見つめていて、やがて、

カナ　隣から、弾んだ声の音程ハズレの「竹内まりや」のひとりカラオケが聞こえる。万感胸に迫るのか「カムフラージュ」がなってない。懐かしい珍しい友人からメールがあったから、敬語を同級生に使う時の距離感を大切にして、わたしもそこにいたよ、もしかしたらスレちがってたのかもしれないね。曖昧に返事した。

カナ、じっと手を見て、ぎゅっと握りしめる。

カナ　たくさん話してくれたけど事情は飲み込めず、でも離婚するとかしたいとか、延々と堂々巡りを繰り返すので、わたしも（堂々巡りの）渦に巻き込まれて最後は、じぶんに負けないでね、こういってしまった。ぎゅっと手を握ってきたので、ぎゅっと握り返してあげて、あとは無言の一時間だった。…ヒトって思いがけないものを背負っているんだなぁ……。ファミレスを追い出されてからは、繁華街を歩いて、映画のワンシーンみたいな曙光のきざす公園も歩いて、大声でお気に入りの曲をお互いに歌って、駅まで遠回りした。スレちがうヒトにはヘンな目でみられたけど、わたしたちは手を握って歩いた。求めたのはわたしだった。厚みも肌触りもちがっていた。…このぬくもり、ひさしぶりだった。朝の、まだ冷たい空気のなか、その手が温かくて…いまもあったかい。元気でね、笑って別れた。なんども振り返ってわたしをみるのでその度に手を振ってあげたら、どんどん大きく振り返すことになっておかしかった。そんなみさきさんが、わたしがカレにしていた姿にもダブってくるから、愛おしくなって、ちょっと泣けた。（今朝を思い返すように見上げる）……あれはレッドカードじゃなかった。空気中、大気層の中には、何億何兆もの、ゴミやチリが舞っている。これに光が当たって拡散することで、空の色が変わる。もしゴミやチリが大量に空気中にあると、ドラマチ

ックな赤い空にならない。澄んだ空気だから赤焼けがキレイ。星は空気が汚れているから瞬いて、澄み渡った空だと瞬かない。真っ暗闇の夜空も、街灯りが輝いている限り、真の暗闇に触れない。――不気味を伴うのがセカイの真実。

沈黙。

窓際に行き、次第に暗くなっていく景色を眺める。

向き直って、今度は部屋を眺める。

音楽が静かに入る。

カナ　窓とカーテンを閉めて、部屋を真っ暗にする。真っ暗にはならないけど真っ暗な部屋に、ひとりでいる。……この暗さ、やっぱり耐えられる。（間）嘘偽りのない事実をみようとしても、セカイはヒトのナニカで包まれていて、守られていて、この東京の街も、わたしにとってはカレの声が届く限り、わたしだけには特別な意味も含まって、守られているんだと思う。そう思うと、わたしはこの街にいる限り、カレから訣別することができそうもない。

音楽の中、立ち尽くすカナ。

シーン3

店（夜）

音楽の中、場面は変わって夜の店内。居酒屋。

敏行とミフミが、カウンターの席に、横並びに座っている。

音楽が徐々に消えてゆき、長いと思うほどの間が流れて、

敏行　話すことはとくにない。

ミフミ　…そお？

敏行　一人暮らしだし。ずっと。それだけ。なにもない。

ミフミ　じぶんのことは？

敏行　話さないことでやっていたい。

ミフミ　仕事の話？

敏行　秘密にしたい。

ミフミ　昔のこととか、話したら、いいんじゃない？

男　それも話さないことでやっていたい。

ミフミ　……。

敏行　……

ミフミ　お酒たのむ？

敏行　まだあるし。

ミフミ　……。

敏行　……

ミフミ　……
敏行　……
ミフミ　お昼になって、会いたいなんていって。ずっと寡黙。
敏行　うん。
ミフミ　考えて考えて、ここにこうしてる。
敏行　うん。
ミフミ　……。
敏行　……
ミフミ　（肩で息して）忘れているとイヤだから、わざと触れなかったけど。
敏行　ん？
ミフミ　一緒した、初めて会った日のこと、覚えてる？
敏行　（間あって）夜だった。
ミフミ　うん。
敏行　渋谷。
ミフミ　ウン。
敏行　フ。
ミフミ　なに？
敏行　そっちが忘れてるのかと思ってた。
ミフミ　ううん。
敏行　渋谷のパルテノン。
ミフミ　ウン。
敏行　映画。ミュージカル。
ミフミ　マンママミーア。
敏行　マンママミーア。（笑う）なんで誘われたかわからない。
ミフミ　観たかったの。どーーーしても。
敏行　いわれた。
ミフミ　混んでて。前から二列目。
敏行　うん。なんでって思った。
ミフミ　観終わって、外出ると、並んで歩いてた。
敏行　アバなんかうたって。ごきげん。
ミフミ　そっちがクチずさんだんでしょ（最初）。
敏行　ハハ。うたった。だけどふたりだった。
ミフミ　うん。
敏行　ふたりなら恥ずかしくなかった。でたらめにうたった。
ミフミ　英語わかんないもんね。
敏行　そう。
ミフミ　映画終わってもメロディーしっかり残ってて。歩きながら、いつの間にか、
　ハミングしてた。
敏行　してた。
ミフミ　たらたら、たたたたら～（曲「マンママミーア」を、「た」と「ら」でうたう）
敏行　ひどいもんだ。（笑う）
ミフミ　（笑う）うたって歩いた。

敏行　うたって歩いて、サントラ見にいった。
ミフミ　ピンクが好きだって理由でHMV。
敏行　黄色のタワーは意味もなく混んでる。
ミフミ　ウンウン。いった。
敏行　買ったんだっけ？
ミフミ　買った買った。
敏行　だったっけ。え、ん、借りた？
ミフミ　断られた。
敏行　そうだったっけ？
ミフミ　そうだった。テレるって。
敏行　そっか。
ミフミ　そうだったんです。
敏行　そっか……。
ミフミ　なんども聞いたよ。ひとりで。
敏行　うん。
ミフミ　CD。
敏行　うん。
ミフミ　ね。マンママミーアの歌詞、知ってる？
敏行　ううん。
ミフミ　調べて。すごいよ？　未練タラタラ。マンマ、ミーア、たらたら、たっぷり……。
敏行　……そっか。
ミフミ　なんども聴いて、聴いて、覚えちゃった。
敏行　……。
ミフミ（寂しく自嘲して）おばさんのメリルストリープが熱唱。だい熱唱。ハハハ。
敏行　……いい思い出。うん。いい思い出だった。（言い切る）
ミフミ　……あたしたち。
敏行　うん？
ミフミ　知り合って、つきあって。一緒に暮らすことなかったね？
敏行　……。
ミフミ　ひとすぢだったのに。あたしは。
敏行　（俺はもう）変わった。
ミフミ　ウソ。
敏行　……。
ミフミ　これからどうする？　どうしよっか？
敏行　……ずっと考えてた。聞かないでほしかった。
ミフミ　聞かなかったこと、しない。しないね？
敏行　……うん。
ミフミ　一〇年。
敏行　うん？
ミフミ　どお、おばさんでしょ？　もう、ちょっとやそっとじゃ、なんでもない。
　なんてことない。

敏行　……
ミフミ　ね？　（と同意を求める）
敏行　（間あって）会うだけあって、
ミフミ　ん？
敏行　あの頃。
ミフミ　うん。
敏行　することして。
ミフミ　うん。することして。
敏行　男は逃げた。
ミフミ　ひとづてに聞いた。結婚のこと。
敏行　……。
ミフミ　おめでとうなんていわない。一生。
敏行　……それでいい。
ミフミ　どおする？
敏行　……
ミフミ　（見つめて答えを待っていて）――
敏行　（苦笑）一〇年。ぜんぜんおばさんじゃない。
ミフミ　そお？
敏行　みとれる。
ミフミ　フフ。連絡、キッカケつくれなかった。
敏行　（苦笑）蜘蛛が出ちゃあ。
ミフミ　そうだ。
敏行　あれから。
ミフミ　ん？
敏行　ひとり考えて。
ミフミ　うん。
敏行　偶然の巡り合わせ。偶然の一致。そんなこと。
ミフミ　むずかしい。
敏行　ありふれている現象のなかに潜むなにか。日常に起こってて、でも見過ごしている、でも時々気がつけて読み取れる。そんなような。
ミフミ　はい。
敏行　その時、こんなふうに思う。ああ不思議なことも起こるもんだなあって。
ミフミ　神秘的。フフ。
敏行　おれは、おれはね……のこのこきたんだ。いまさらもう…どうこうってもんじゃないね？
ミフミ　おう。
敏行　抱きつきたい。
ミフミ　（間あって）うん。
敏行　だけどお店だ。
ミフミ　かまわない。
敏行　みっともない。
ミフミ　ちっとも思わない。

敏行　……
ミフミ　いこう。出よぉ。

ふたり、視線を重ねる。
音が入る――

みさきが割り込むように入ってきて、憮然と立つ。
場面は変わって、夜。

外②（夜）

みさき　オールが響いて、仕事にならなくて早退した。（こ憎たらしくいう）サンジュウ！　会社はそれでも平常運転できるから、わたしの存在意義？をちょっと考えるけど、考えても仕方ないから考えないことにして、早退でせっかくの時間は、歯医者とギャラリーを「ハシゴ」して過ごした。
歯医者では、一本ずつカチカチ、音を立てながら歯と歯茎が点検されて、消毒液の匂いのする治療室で無防備なおおぐちのアーをした。痛みの総和ともいえる奥歯をコツコツ慎重にたたかれたから、ゴム手袋の医師の指をぺろりと舐めてしまった。スマイルもらった。今日はどうしましたか、というので、奥歯を抜いてくださいといってみたら、親知らずを抜くことにまつわるいろんなプラスマイナスを教えてくれた。歯石だけとってもらって次の予約はしなかった。やっぱこわい……。
歯医者のド緊張で目が覚めてしまって、ふらりブラリでみつけて覗き込んだギャラリーは、猫の写真の展示でガラガラだった。作者とおぼしきカメラマンっぽい若者につかまり、こっちが聞いてもないのに、熱っぽく作品、いちいち力説されたので、イチャモンつけてやった。と、そこは若者らしくいい返してくるので、猫は猫で猫なんですから猫を撮ってくださいじゃあね、（そう）根拠も正論でもないことといったら、どういうわけか若者はきゅううんと縮こまったから、頑張ってねって励ましてギャラリーをあとにした。

間。

みさき　今夜をどうするか。旅のトモなんとやら、とかあるから、きのうのあの子と連絡先を交換しなかったから、いま猛烈に悔やんでいる。ときめく大学生の妹の一人暮らしの部屋に、転がり込んだっていいけど、あとでいろいろヤッカイなことになるから、ごヤッカイになるのは避けるとして、じゃあまあ、今夜は家に帰ったっていっか、なーんて思ったけど、負けるようで、でも本当は向かい合わなくちゃいけないのも事実で、でもやっぱり、完全な他人になる勇気と覚悟はいまもって自信ないもんだから、そんなこんなで、こころは迷路なので、とにかく歩き続けることにした。前に前にとにかく歩いていれば、ナニカ前向きなもの、出てくるような気がしている。

みさき、ずんずん歩いて、去っていく。

シーン4

外・渋谷のスクランブル交差点③（夜）

カナ、スマホのカメラを虚空の一箇所に向けて、撮りながら、

カナ　レンズを向けてシャッターを押す。いない姿をおさえて何枚も撮って保存する。いない現実をじぶんに焼き付ける。なんども押す。
ファッションやインテリア家具は、ヒトの身体や生活について、どんなふうに感じているか考えているかを、目にみえるカタチにしたもの。みえるカタチに生み出されたもの。ことばも、おなじ。そのヒトの感じていること、考えていることが、ことばのカタチになっていて、そのヒトのいろんなものがみえている。（押す）

撮った写真を確認したりしながら、虚空にいう。

カナ　福岡県博多駅に名物警察官がいる。朝と夕方のラッシュどきに通りすぎる大勢のヒトひとりひとりに、おはようございます、こんばんは、おつかれさま、明るく声をかけている。挨拶でヒトをイイ気持ちにさせていて、しかもすごいなーひとりひとりだよ？とかキミがいって、どうして警察の呼びかけは上から目線なのか、横柄なのはオレたちじゃないか、ボソッと仕事の疑問をクチにしたこと、わたしは覚えている。東京湾花火大会の交通課二年目のときだったね。あの頃から始まってたんだよね。ヒトに助けてもらいたいと思ったら、助けてあげたいなーって（ヒトに）思ってもらわなきゃ助けてもらえないよね？って話したね。（見遣る）してもらいたいことをヒトにしてもらえるため、キミらしさ満載の気持ちのすべてで、いま、声、届けられているね。キミそのものがことばのカタチになっているよ。

スマホを向けて押す。
音が静かに入る――

カナ　わたしは過ぎてしまった時間のなかに閉じこもってるばかりじゃないのに、キミの声が聞けてしまう限り、忘れるのが難しいと思うんだよ。一緒に成長して、変化して、お互いにニンゲンをつくってきたから、どうしたっていまでも、こころに響いてきてしまって、キミが強烈で、簡単に他のだれかでごまかすことができないんだよ。（押す）

間。

カナ　ひとりでここにいるのは、ひどくさびしく感じられるけど、わたしの内側じゃない、外側の世界にもうキミが存在しないことを、じぶんになんどもいい聞かせています。わたしのいる世界は暗くて、とてもキラキラした場所じゃないんだけれど、一緒につくった思い出が、鮮やかな色に染まって立体的に蘇らなくなって、時間とともに記憶も薄まって、消えて、泣けない日がくること…そう遠くないみたい。…遠くないうち、ちがったわたしになります。なってしまいます。恋もできちゃうと思います。（押す）そばでキミが仕事で成熟してゆく姿は、途中までしかみれなかったけど、みていて、みてきて、ともに成長する喜びを感じていました。うれしかった。じぶんのことのようにうれしかった。イラストもキミは（いってくれた）大丈夫絶対いつか日の目をみるときがくるよって。なのにわたしは、イラストも仕上げないでフリーターみたいな身分で、仕事もらっても僅かだったから、そういうじぶんがみじめなで、劣っていると感じて、キミを責めて、追い立てて、理解のことばを強要した。……そのことゴメンなさい。…ようやく（いえます）ゴメンなさい……。わたし、大好きだったから、キミが一生懸命決めた別れ、受け止めたけど、受け入れるにはとっても時間がかかっています。…それでもいま素直に思うよ。一緒に過ごして成長して「わたし」をつくってくれました。わたしのこころにはキミがいます。キミが何者になって、どこに行っても、わたしは…愛を贈ります。（押す）東京オリンピック、まさかのミニパトに乗って警備してた東京湾花火大会のときみたいに、道の端の目立つトコまで出てって、おっきく手を振るよ。おどろかすよ。テレビもマスコミもキミの活躍を面白がらなくなってもう追いかけなくなっても、キミはキミでいいんだから、キミの場所で、声を、ことばを、届けていてください。受け取ります。ちがったわたしになっても受け取ります。わたしもそしてイラストで届けられるようになります。あの頃、約束した夢、叶えて、キミに届かなくても、わたしだけに出来るカタチにして、いつか、ありがとうを贈ります。

音――

カナ、虚空の彼からやがて視線を上げる。渋谷の夜空を見る。

カナ、一歩を踏み出し、去っていく。

部屋③（夜）

音の中、トモコと男が入ってくる。

場面は変わってトモコの部屋。夜。

トモコ、スマホを耳に近づけて、男の声を聞く。

男は、口元にスマホを構えて、想いをことばにしていく。

男　どこから話していいのかわかりませんが、一方的にこれは話さないといけないんですから…こんなこと、若かった時ぶりです。胸を膨らませて、手紙を書いた時のことを覚えています…（知ってもらいたいことを思い返して）、娘がいます。

いま大学一年生になって神戸にいます。ぼくたち福井に暮らしていました。仕事は娘の入学を機にやめました。ぼくの妻だったヒトは、ずいぶん前に出て行きました。理由は正直…わかっていません…いまも。ただ、別れの気配が漂い始めてからは、なにごともうまくいかなかった。どうすればよかったんだろう…冷たかった。まるで恋愛をひとつ終えるように、気になるヒトができたとだけいわれ、出て行きました。相手は知りません。娘は幼かったので、親権で少し強引なことになりましたが、彼女に丸ごと渡してしまうべきだったとあとで後悔しました。どんどん娘が似てくるんです。あんなに似るものなんでしょうか。中学はまだ面影だった。高校になると、もう母親似の域を超えて、ますます彼女に近づきました。目を奪われていると、娘は娘でぼくがなにかに耐えている顔をみては、母親のなにかを振り払おうとする、してくれます。ですが、もともとそれは無理なことで、娘にどうこうできるものじゃありません。彼女と出会ったばかりの頃の姿に、このまま娘が成長してゆく、そんな気がした。こういう現実と、うまく付き合うことも、向き合うことも、できがたくて、耐えがたくて、転職と偽って東京に逃げました。九ヶ月目です。ウソはいつまでもウソをつき続けなければいけませんから、やがて暴かれます。バレてしまうまえに、じぶんを変えたいと思っています。平気で娘をみれるためにも、妻を忘れさせてくれるナニカと出会えればよかった。けど、じぶんにウソをつくのは、とてもむずかしいのを再確認させられています。こいつとなら、そうホンキで思えて、死んだっていい永遠を誓ったっていい、そうホンキで思えて尽くし続けたい相手と出会い、儀式とはいえ、素直に永遠を誓うことができていたぼくは、そしてこの世になぜ生きているかの意味を掴まえたとさえ思えていたぼくは、あれはどんなに僥倖（しあわせ）であったかと、いまでも感じているんです。（寂しく笑う）「こころが奪われて」しまって、こころをどうやって取り戻したらいいか、わからないんです。…あなたは笑うかもしれません。女性。ひさしぶりでした。こころに関係なく身体は厄介ですね。あなたの裸をよくみようとしました。いっさい似てないのに、ぼくには彼女がダブってきた。くるんです。やっぱりかと思いました。まざまざでした。でもあなたとあんなふうになる、そのまえすこし、こころが弾んだんです。ウソじゃなかった。ちがうじぶんに成れてゆくような気がしました。ぼくのこころのなかに残り、ぼくのなかで過去の彼女をもとにつくり出されてしまっているまぼろしを、パリン、風船を弾くように割ってくれそうでした。（間）こんなにもたくさんのヒトがいて、たくさんの場所があって、こんなにも無数の音や色がひしめきあっているなかに彼女の、姿が遠くなってゆき、街を行く人々のなかに紛れてみえなくなってしまうのを見届けて、呼び止めることもしないで、ぼくは胸のあたりまで手を上げて小さくなんども……、途切れようとしない人波にみえなくなる彼女を眺めて、ぼくは一歩を……娘に会いに行けたらと。……あなたにこんなこと話していいんでしょうか。でも、そんなことを願っています（あなたに）。…こんなメッセージでいいのでしょうか。ぼくもなるだけ正直に話しました。返事もらえたら。

男、ボイスメモの録音を終えて、スマホを見つめてじっとする。

じっと聞いていたトモコやがて、

トモコ　あたしは…（五秒息を吐く）……（全身で受け止めてみたいです）はい。

音――。

部屋④（深夜）

ミフミと敏行が入ってきて、離れてそれぞれ立ち止まる。
音の中に、電話の音が徐々に静かに重なって、

敏行　テレフォンがなった「お連れの方がお帰りになったようですがよろしいですか」。フロントからナゾな問いかけ。質問を飲み込めないでいると囁かれた「追いかけますか？」。入るとき、ひと好きそうなおばちゃんだった。いま何時ですか。「七色の二時です、一〇時まで利用できますから」。……。
断られるつもりで、夜空いてる？　弾みで送ったメールに大丈夫と返ってきて、ものの弾みのままそのまま弾んでしまった。一〇年なんて、時間だけが過ぎて、なんて手応えがないってくらいアッという間で、いろんなことが思い出せた。なにか起きても、なにも起きない時とおなじように、時計の針が二時から三時になるように、時が過ぎていくようだった。（ふと股間に触る）……おれの身体はなんでもなかった。なんでもなかった……。

外④（早朝）

ミフミ　カイくんがどうしてか気になる、慣れないじぶんがいて、下手な夢みないことを決めたくて、でもそのことでちょっとあたししあわせなんだよーってあてつけたくもなって、だって年齢的にもう最後の相手って思ってたからあの頃、だからいまでも気軽に誘い出してきたアレをギャフン、したくなってしまった……。おない歳のオンナはもっとちゃんとした相手と恋愛をして結婚をして、こどもを育てて、周りに比べると、（大きくいう）著しくみっともないことをしているんだろうか？　でも、なにかを脱ぎ捨てたような、手放すことができたような、シコリが取れたような、とっても身軽な気分になって、あたらしがって歩いている。

鼻歌しながら歩くミフミ。（曲「みんな夢でありました」森田童子）

歌うミフミのそばに青年が入ってきて、座る。
ミフミは、青年と向かい合って、座る。
場面は変わり、ギャラリー五階。夕方の頃である。

3　そしてこれから

シーン1

ギャラリー（夕）

ミフミと青年が向かい合って座ったまま、無言でいる。
やがてミフミが、切り出すようにいう。

ミフミ　それって、いやらしい意味も含まれてる？
青年　いやらしいって？
ミフミ　うーん。オトコとオンナ的な。
青年　そういうことしたくて、いってるわけじゃないけど、いやらしい意味ってことよりも、もう一度会いたいなって思ってます。
ミフミ　そう。
青年　でも、その先、どういう気持ちになるか、わからないです。
ミフミ　うん。

間。

ミフミ　フフ。おかしなこというけど。
青年　はい。
ミフミ　わたし、友だちが欲しい。友だちいないってわけじゃないの。ここでこうしていることだって、友だちのお手伝いだし、昔の会社のヒトたちとはいまだって付き合ってるし、ご近所だって付き合いあるんだけど、だから友だちけっこう多いっていうか、広いほうなんだけど、（なんていうかな、）ちがう他の世界がほしい。カイくん、ちょっとそういうところ連れてってくれそうだから。
青年　（おれが）ですか？
ミフミ　そう。
青年　（そうと思えず）ですか？
ミフミ　フフ、若いもん。若いっていっても、いちおうオトコのヒトだから、友だちほしいっていっても、ああオトコのヒトかって思うところあるんだけど、絶対そういう、オトコとオンナ、みたいな関係にならないで、意地はってでも一生ならないで、友だち。
青年　どうかな。
ミフミ　どうかなじゃなくて、そう決めたいの。友だち。
青年　それじゃ、おれのキモチはどうなるんですか？
ミフミ　いっとき。どうせいっとき。抑えて。我慢して。お互い友だちでいるの。
青年　もしかしたら、いまだって抑えてるんですよ？
ミフミ　うん。
青年　いってしまえば、チカラづくでなにかしようともできるし。

ミフミ　いってるだけ。そういうことしないヒトなの知ってる。
青年　どうかしている時は、どうかしてしまうものです。
ミフミ　でもそういうことしないヒト。
青年　おれ思うんです。ただ話して、雑談したり真剣に相談したり、そういうただしゃべりたいヒトってわけじゃないんじゃないかなって。
ミフミ　うれしい。ウソでも。
青年　ウソなんか（いってない）。
ミフミ　ただおしゃべり。それだけ。ふつう、おしゃべりしてても、もしかしたらっていうの、思ったりするけど、そうじゃなくて、おしゃべりするだけ、それだけの約束。
青年　そっちはそれでいいのかもしれないけど、
ミフミ　（強く）こっちもそれだけじゃないからいってるの。
青年　え。
ミフミ　また会いたいなって思ってるの。わたしとちがう、他の世界連れてってくれて、それ、きっと楽しいんだろうなーって。だから、いうの。
青年　（考える間あって）もし、約束ができなかったら？
ミフミ　もうバイバイ。さよなら。
青年　きっぱりいいますね。
ミフミ　そうよ。（自分にいいきかせる）そうよ。
青年　電話メールは？
ミフミ　しない。電話したりメールしたら、会わないことのほうが不自然になるでしょ？

間。

青年　（抑えているが語気は強く）ならない保証なんか、わかるかよ。気があって、話があってきたら、ふつうそれでたのしくなって、こころにちょっとずつでも思うところできるじゃないですか。でも、そうならずにそのままでって……むずかしいです。
ミフミ　でもそうして。
青年　おれ、どっちかっていうと、いつもドライっていうか、だからカーってじぶん動かさないと、ジッジッとして、だから、いまだって、だいぶ、じぶんでもいつもとちがうなってこと、やっています。わかりましたそうしましょうって、（そんな風に）わかりきったような、割り切ったような、クチではカンタンにいえるけど、こころじゃちっとも、
ミフミ　ねえ。いちばん危ないところまで行って、行きながらなにもなかった、そういう相手いる？
青年　そりゃ。
ミフミ　いるんだ。
青年　いますよ。いまだってそうなりかかってますよ。
ミフミ　そのヒトと一〇年後、十五年後、二十年後、どこかの駅でばったり会ったら、いまでも顔がドーッと赤ぁくなるんだよ？

青年　…そういうものでしょうか？
ミフミ　（でも）最後まで行ってしまったら、そんなふうに、柔らかあく相手のことみれない。もうグズグズでダメダメ。そんなんになっちゃうの。
青年　（でも）いま目の前にこうして、おれは居ます、こんなふうに。
ミフミ　フフ。あたし、恋愛？みたいなこと、そりゃしたいけど、でも、なんかよくわかんないの。ブレーキみたいなの？歯止めがずっと昔よりバカになってて、パッカパッカしてて、たぶん、見境いナクなっちゃいそう。カイくんみたいに若いと、じぶんの歳忘れて、おないどしの気になって、若やいだことしちゃうんじゃないかって不安、どうしたってココ（胸）にあって。怖いわけ。
青年　はい。（強く）いいじゃないですか。
ミフミ　ううん。
青年　……
ミフミ　このまえ、カイくんにはじめて会った時、じぶんでもヘンなくらいしゃべりすぎちゃった時、はずみで話しちゃった、昔の恋人。若いのと結婚したのね。そりゃ不釣り合いよ。とっても。おおいに。奇跡を上回った奇跡が起きたみたいに。なのに、だからか、精一杯やってるの。（わたし実情を）知らないけど、多分やってる。若いっていろいろ魅力的に思えちゃう。
青年　べつに結婚してりゃ、他のだれかと会えば、しかもたのしいってなれば、浮気とか思うかもしれない。だれかの気分を悪くさせるかもしれない。けど、ぜんぜんそういうわけじゃないんだし、おれだって、
ミフミ　平気じゃないの！
青年　…平気じゃないってなにが？
ミフミ　平気でいたいの。

間。

青年　いや、黙らないでください。

間。

ミフミ　……

間。

青年　おれは…、もう、どういったらいいかな…、……、…みとれます。ごはんとか、大口開けて食べてるとこ、好きです。
ミフミ　（見ていて、笑いだす）
青年　はい。恥ずかしいことといったんです。
ミフミ　みとれるだって。フフ。
青年　はい。
ミフミ　うん。ウン。あたし、そんなことといわれて、うれしいって気持ちの前に、ウソいわれているみたい。信じられない。やっぱ、こわい。こわいよ青年。

青年　……

間。

青年　（目を伏せて慎重にいう）用心深く、付き合うこと、しませんか？　…そういう付き合い方って、けじめのあるとかっていうのかな。けじめ。あんまりけじめってことばの意味わかってないけど。

ミフミ　――（聞いている）

青年　また、そんなふうでよければ話がしたいです。

間。

ミフミ　うれしい。とっても。うん。うれしいよ？　でもバイバイ。バイバイね。

青年　……

ミフミ、立ち上がり、ギャラリーの「出入口」に向かう。
最後に一度だけ青年の方を振り向いて、小さく手を振る。

青年　……

青年、ただ見ている。
ミフミ、去る。

青年　……なんで手を振るかな。それ…どういうこころなの？

青年、もう見えないが見送っていて、涙が溢れてくる。

青年　……

両手で顔を拭い、立ち上がる。（顔を洗いに）一方へ出ていく。

だれもいない無人のギャラリー空間となる。
だれもいないまま、時間が長く流れる。
このギャラリー周辺の渋谷の街の喧騒などの「生音」が耳に届いてくる。

やがて「出入口」の方でエレベーターが開く音がする。
デザイナー道具を詰めたカバンを持ったカナが入ってくる。
カナのカバンは半透明。クロッキー帳や色鉛筆などが透けて見えている。
カナ、リニューアルして様変わったギャラリーを眺めながら歩く。

奥から（洗面台のある場所）青年が出てきて、ギャラリーに戻ってくる。
ふたり、目が合う。

カナ　！！！
青年　！
カナ　アヤシくないです！　ホント！　空いてて。空いてたから。…よかったです
か（勝手に入っても）？
青年　（どう答えていいかわからず）……
カナ　ここのカタ？
青年　……今週は利用者がいないそうで。どうぞ。

青年、会釈する。そして顔をぬぐったまま手に持っていたハンカチをしまい、
ギャラリーに並んでいる椅子たちの片付けに取り掛かる。
カナ、おじぎする。
間が長く流れる。

カナ　話しかけても…いいですか？
青年　（得意じゃないという思いがあるが）おれでよければ。

カナ、おじぎする。

カナ　（歩きながら）スッカリ変わっちゃったなー。（壁）黒かったんだよ？
青年　（片付けながら）はあ。
カナ　ずっと前きたことあって。ひさしぶりー。
青年　（片付けながら白い壁を見たりして）はあ。

カナ、ギャラリーを歩く。
青年、片付けの手を止める。

青年　……あの。
カナ　？
青年　しばらくいますか？
カナ　そんなに（は）。
青年　（目を伏せて聞く）コーヒーどうですか？
カナ　？？？
青年　あ、どっか行くとかじゃなくて。下の階にあって。
カナ　（考える間あって）気持ちだけ。いただきます。（ぺこりする）
青年　……（うなづく）

カナ、ギャラリーを歩く。
青年、また片付けを始める。

青年　（片付けながら）絵描きさんですか？
カナ　うーん、そういうことにしておこうかな。
青年　じゃあ下見？
カナ　うーん、そういうことにしておく。
青年　（そういうことにしておきます、という調子で）はい。

青年、椅子などをギャラリーの片隅にまとめ終える。片付けが終わる。
そのまま片隅にぽつんと立つ。
間。

青年　（ためらいあるが聞く）ちょっと、厄介な質問、いいですか？
カナ　（なんだろうと思うが）…よしっ。

ちょっとの間。

青年　けじめってなんでしょう。男と女のあいだの意味でいうところの、けじめ。
カナ　（間あって）聞くねー。
青年　はい。
カナ　オトナ。
青年　からかわないでください。
カナ　フフ。けじめなんてわかんないよ。
青年　はい……。（冗談をいう）ドロドロならわかります？
カナ　おいっ。
青年　（苦笑）はい。

ふたり、緊張がほぐれて、また微笑む。
カナ、答えを探すように考えながら歩いて、

カナ　でも…相手のしあわせを願うことじゃない？　じぶんとちがった望みを持ったヒトがいて、そこに関わりあって、お互いに共通の意味を持ちつつじぶんのしあわせを祈るのとおなじくらいに、相手のしあわせを願う。みたいな。

ちょっとの間。

青年　…もしおれのしあわせが相手を求めることで、相手はそうじゃなかったら？

ちょっとの間。

カナ　追いかけ続ける。そう理解するなら、追いかける、しかない。たとえ、そばに相手がいなくなって、離れていったとしても。

ちょっとの間。

青年　なんか意味はあるんでしょうか（そんなことして）。
カナ　（寂しく笑う）じぶんのしあわせのためでしょ。
青年　……わかりにくいしあわせですね。
カナ　だね。
青年　苦しいですね。
カナ　（間あって）…お互いに望むものが一致してるのって、ほんのちょっとのパートナーだけなんじゃないかな……。でもこの世界は、だけど、みんながそれぞれの仕方で、幸福と呼べるものを築こうとしてて、築いているんだ、きっと。（と考え考えいう）
青年　……
カナ　たぶん。

間。

青年　もし…他にちがう相手が（じぶんに）みつかったら（その時はどうなのかな）？

ちょっとの間あって、カナ、半ば自分にいうように答える。

カナ　キミは、その相手のしあわせを願い、思い出をキチンとじぶんなりにあと片付けしてあげる。あと片付けをして、じぶんのなかに残している過去を、次の相手に感じさせないで、あたらしいヒトと、はじめてのような、はじめましてのようなやり方で、お互い向かい合えるよう、あと片付けをしてあげる。……お。けじめっぽくない？
青年　……なんか（はい）。
カナ　（静かに笑う）アタマとこころはちがうけどねー。
青年　はい。
カナ　ね、相手どんなヒト？
青年　それはちょっと。

ふたり、静かに小さく笑う。

シーン2

部屋（夜）

敏行とみさきが入ってくる。場面は変わって、部屋、夜。
敏行とみさき、まっすぐ向き合って、立っている。

敏行　おかえり。

みさき　ただいま。

間。

敏行　雨、大丈夫だった？
みさき　（答えない）
敏行　……。ごはん作ってある。ケーキも残ってる。

間。

みさき　なにしれっと。
敏行　……うん。
みさき　どこ行ってたー、とか、なにしてたー、とか聞かないわけ？
敏行　……どこにいたの？
みさき　朝まで男のヒトといた。
敏行　え？
みさき　セックスした。ふた晩とも。
敏行　……それは…そう……

間。

みさき　だとしたら、どうする？
敏行　……？
みさき　どう？　どうしてほしい？　（そう）だとしたら？
敏行　（やましさあるので）……どう…したい？
みさき　どうしてほしい、（そう）だとしたら？
敏行　……どう…したい？
みさき　（きっぱりいう）出て行けっていわれたら、出て行く。
敏行　ソノ男のところに？
みさき　連絡先知らない。
敏行　……
みさき　謝る気ない、まちがってたとか悪かったとか、そういうこともいいたくない。「だとしたら」ね、わたしは。

間。

敏行　出て行くなっていいたい。…だとしたら、だとしたら……。
みさき　――いえば（じゃあ）？

間。

敏行　……出て行くなとはいえない……

みさき　……。
敏行　でも一緒にいたい。
みさき　……。
敏行　許したり、許そうとしたりして。
みさき　…許すってなにを？
敏行　浮気した…としたら……。
みさき　だから。「だとしたら」話じゃん。

間。

敏行　でも……だとしたら話って、本当はどっちなの？

間。

みさき　どっちだと思う？

間。

敏行　信じる。

間。

みさき　とうぜんでしょ。
敏行　……うん、そっか……
みさき　ファミレスにファミレスした。帰る場所があって、寝るところがあるって、やっぱいいね。でも。いつだってあの紙つきつけるから。奥歯痛いし。
敏行　……

間。

敏行　おれ、ちょっとわかった。わかったから。
みさき　……なに？
敏行　好きすぎてしょうがないから、しょうがないことになってるって（局部が）。
みさき　理屈がとおりません。
敏行　（強く）がんばれる。自信ついたから。
みさき　……なんかあった？
敏行　……。

ふいに敏行は両手を高く上げて万歳のポーズ。
天井を見上げて、床を見て、そして逆立ち。

みさき　……？

敏行　（逆立ちでいう）いろいろあってマッスグいえないから、逆さまになっていうけど、おれは、おれはね、問題いろいろだけど、出て行ってほしくないっ！
みさき　……。
敏行　（逆立ちのまま、みさきを見て）みている。目をみている。瞳の奥をみている。鼻筋をみている。くちびるをみている。アあッ。（逆立ちが崩れる）
みさき　……。

敏行、すぐさま、万歳してまた逆立ちする。

敏行　（逆立ちでいう）ここに、おれの目の前に、ひとりのオンナがいる。この眩しさに、圧倒されているっ！
みさき　（呆気にとられているが、静かで強い口調で）…いい加減なこといってる。
敏行　みとれる。そそられる。離したくないっ！　アあッ…（逆立ちが崩れる）
みさき　続かないことして、いって、どうするの。
敏行　……。

敏行、ここは考えて、三点倒立に切り替える。

敏行　（三点倒立でいう）がんばるっ。一生懸命もっと。がんばるっ！
みさき　……。
敏行　――（頑張っている）

敏行はこんな風に逆転して向き合って、いうことで、誠実であろうとする。
みさき、ただ見ている。

みさき　のぼせてる。茹でタコが目の前にいる。
敏行　がんばる！！！　うおおっ（バランスが崩れる、が、こらえて）ほうぅぅ。
みさき　……。
敏行　（頑張っていて）――

みさき、時間をもてあそぶようにゆっくり近寄る。

みさき　（赤くなっている敏行の顔を覗き込む）わたしといてしあわせ？
敏行　もちろ、うわわあしっ！　あしっ！　ねぇ、あしっ！
みさき　（反射的に、ぴょこんと足を支えてしまう）……。
敏行　ほうぅぅぅぅぅ……
みさき　……。

三点倒立の敏行と、そばで手を添えて支えているみさき、このふたりの姿。
みさき、敏行の両足を支えながらやがて呟く。

みさき　あなたのしあわせとわたしのしあわせが、一緒ならいいんだろうね。

音楽が入る。
みさき、遠くの未来の方角を向いて呟く。
みさき　どうか、これが、ハシカのような痛みだといいなと思っています。
みさき、音楽の中、手を離し、ひとり去る。
敏行、三点倒立を崩して、みさきのあとを追いかけて、去る。

外①（夜）

音楽の中、トモコが入ってくる。
音楽に重なって喧騒や雑踏が静かに聞こえてくる。
場面は変わって、外。渋谷スクランブル交差点。夜。
トモコ　待っている。また雨が降っている。記録的短時間なんとかも更新だろう。
トモコ、スマホを耳にする。
男が入ってきて、スマホでダイヤルのふたり。

男　いますか？
トモコ　はい。改札に。
男　改札は東西南北にあります。わかりません。
トモコ　バス停にいてください。先にお店でもいいです。雨、大丈夫ですか。
男　はい。待ってます。
トモコ　はい。
男　CM みました。
トモコ　え？　でもテレビじゃ流れてないけど。
男　ネットで。やっとみつけました。
トモコ　みつけたんですか。
男　ずいぶん探しました。でもみつけました。
トモコ　……
男　どうかしましたか。
トモコ　……
男　バナナの子供たちに混じって後ろにひとり踊ってて、笑ってしまいました。
トモコ　はい。
男　いまも待ちながらみてました。笑ってます。
トモコ　うれしいです。
音楽と雑踏の中、それぞれ、待ち合わせの場所に向かう。

外②（夜）

音楽と雑踏の中、カナが歩いてくる。
渋谷スクランブル交差点。ギャラリー帰りの夜。
カナ、立ち止まって、あの場所を見遣る。

カナ　思い描いていた未来がやってこないことに慣れてきてしまって、変わってゆくじぶんもあるけれど、それでもいつか、いつかどこかで。わたしもきょうもどこかで。いつか――

カナ、歩いていく。
音楽と雑踏の中に見えなくなってゆく――

終

【参考映像】

・映画

「ラストコーション」監督アン・リー

「マンマ・ミーア！」監督フィリダ・ロイド

「ブレード・ランナー2049」監督ドゥニ・ヴィルヌーヴ（2017年10月公開）

「スターウォーズ／最後のジェダイ」監督ライアン・ジョンソン（2017年12月公開）

【参考書籍・サイト】

・「Tokyo Nobody」中野正孝

・「原色の街・驟雨」吉行淳之助

・「夕暮れまで」吉行淳之助

・「隣の女」向田邦子

・「芋粥」芥川龍之介

・「充たされた生活」石川達三

・「されど　われらが日々――」柴田翔

・「往復書簡　初恋と不倫」坂元裕二

・「男子の貞操」坂爪真吾

・「内省と遡行」柄谷行人

・「天声人語」2013年6月7日付

・「DJポリス　雑踏のヒーロー」新聞記事　抜粋不詳

・「博多駅の名物おまわりさん」ヤフー知恵袋

・「博多駅の名物警察官」個人ブログ

・「光と色と」光学と色彩学についての話題サイト

・「Photonてらす」光を学ぶウェブサイト

・「空はなぜ青くて、夕焼けはなぜ赤いのか」富士通研究所サイト

・「空が赤いのは大地震の予兆？」宇宙の果てサイト

・「記録的短時間大雨情報の解説」気象庁サイト

・「記録的短時間大雨情報データベース」